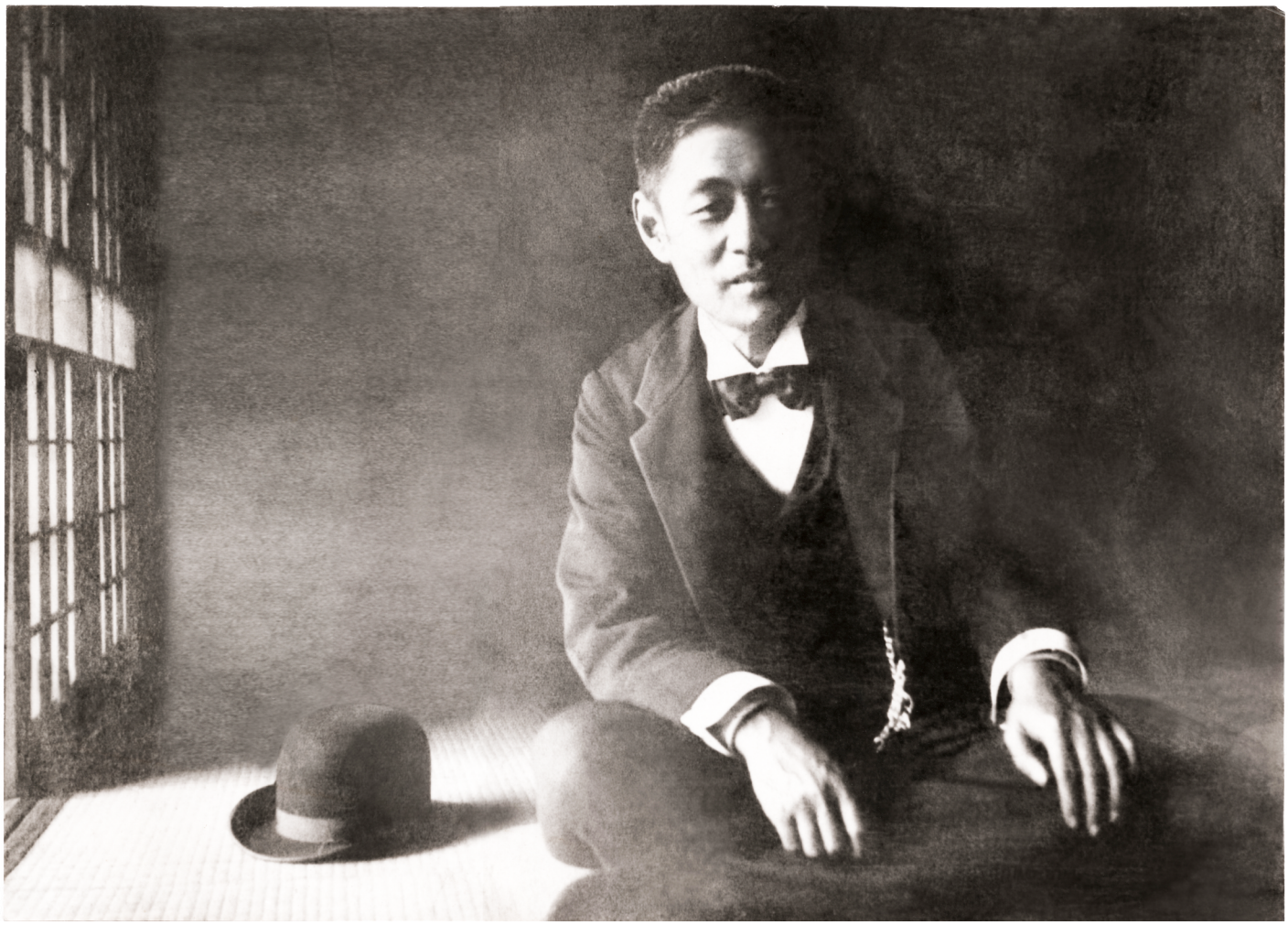


井上円了没後100周年記念図録

CATALOG 井上円了

—モノから見る思想・活動・人脈—

東洋大学

CATALOG 井上円了

東洋大学井上円了研究センター

井上円了肖像　　東洋大学井上円了研究センター蔵

東洋大学の創立者・井上円了（甫水 1858-1919）は、明治から大正にかけて活躍した哲学者・教育者である。

安政5年（1858）、越後国三島郡浦村（現新潟県長岡市）の真宗大谷派寺院、慈光寺の長男として生まれた円了は、幼少期より寺の跡取りとして修練を積んだ。学業も優秀で、慶応4年（1868 明治1）より漢学を習いその素養を磨いた後、明治7年（1874）、16歳で長岡の洋学校（新潟学校第一分校、現新潟県立長岡高等学校）に入学し洋学を学んだ。

その後、京都・東本願寺が設立した教師教校英学科に進んだ円了は、明治11年、国内留学生に選ばれ上京。東京大学予備門を経て、明治14年に東京大学文学部哲学科へ入学し、哲学を修めた。卒業後には、『哲学一夕話』、『仏教活論序論』などの著書を世に送り出し、高い評価を受けた。

明治20年、「諸学の基礎は哲学にあり」の理念のもと、東洋大学の前身となる哲学館（後の哲学館大学）を創立すると、円了は学校での教育のみならず、全国巡回講演（巡講）や海外視察（世界旅行）を精力的に行うなど、独自の教育活動を展開していった。学校経営から身を引いた後は、社会教育に傾注し、大正8年（1919）に生涯を閉じるまで、哲学堂の建設や全国巡講などの活動を通じて、国家の発展と人々の精神の向上に力を尽くした。

本作は、円了の油彩肖像画である。明治38年12月、円了は病気などを理由に哲学館大学初代学長の座を退くことを決意した。明くる年、円了の学長辞任が発表されると、哲学館出身者が中心となって寄付金が集められ、円了の銅像（新海竹太郎作、本書p.52参照）が建立されるとともに、その剰余金をもとに肖像画が2点制作された。本作は、このとき制作された肖像画のひとつで、東京美術学校（現東京藝術大学）教授・岡田三郎助（1869-1939）が依頼を受け、明治40年に完成させたものである。

（北田 建二）

刊行にあたって

東洋大学の創立者・井上円了は、近代日本を代表する哲学者、教育者として、61年の生涯のうちに数多くの業績を残しました。令和元年（2019）は、大正8年（1919）に円了が亡くなってから100年の節目にあたります。これを記念して、東洋大学井上円了研究センターでは『CATALOG　井上円了 ―モノから見る思想・活動・人脈―』と題し、円了に関する多数の資料と解説を収録した図録を刊行いたします。

これまでに本学では円了関連の資料を掲載した図録として、昭和62年（1987）に『図録　東洋大学100年』、平成24年（2012）に『存在の謎に挑む　哲学者井上円了』を出版しています。これらは、東洋大学創立100周年および125周年を記念して刊行したもので、自校史研究の立場から本学の歴史と創立者の足跡について紹介することを主旨としていました。それに対して、本書は自校史の枠を越え、より多角的な視点から資料を取り上げることをねらいとして、学内外を問わず幅広い分野の研究者に解説文の執筆を依頼しました。

本書では、多様なアプローチにより、資料研究から思想・行動・人脈を明らかにする今までにない構成をとりました。これを機に、円了が残した資料への理解と関心がより深まれば幸いです。

最後に、本書を制作するにあたり、ご協力いただきました関係者ならびに諸機関の方々に心より感謝申し上げます。

2019年12月

東洋大学井上円了研究センター
センター長　吉田 善一

目次

刊行にあたって……3
謝辞 / 凡例……5
総論「東洋大学における井上円了の研究」三浦 節夫……6

第 1 章 思想……7

四聖像〈田中 純一朗〉/ 稿録〈長谷川 琢哉〉/ 円満万徳了達諸法〈北田 建二〉/ 哲学道中記〈甲田 烈〉/
仏教活論序論（初版本）〈佐藤 厚〉/ 哲学館開設ノ旨趣〈三浦 節夫〉/ 哲学飛将碁〈岡田 正彦〉/
星界想遊記〈井関 大介〉/ 妖怪学講義（合本第 1 冊～第 6 冊）〈甲田 烈〉/ 外道哲学〈出野 尚紀〉/
通俗講義 霊魂不滅論〈甲田 烈〉/ 心字木魚〈ライナ・シュルツァ〉/ 井上円了宛 嘉納治五郎書簡〈北田 建二〉

第 2 章 活動……23

こっくり様の木〈北河 直子〉/ 海外視察ノート〈出野 尚紀〉/ 哲学館大学開設旨趣之詩〈井関 大介〉/
修身教会雑誌（第 2 号）〈龍澤 潤〉/ 契約書〈三浦 節夫〉/ 邑楽名物御存じないか〈太田 有紀〉/
備後国巡講中作〈重藤 智彬〉/ 印章〈長谷川 琢哉〉/ 抱子幽霊図〈天ケ嶋 岳〉/ 狸と狐〈北河 直子〉/
喫煙具〈北河 直子〉/ 哲学堂の国宝的宝物〈北田 建二〉/ 絶対城〈中村 崇高〉/ 井上円了愛用の品〈古山 千尋〉/
井上円了 最後の便り〈北田 建二〉/ 井上円了遺稿（南船北馬集 第 16 編）〈出野 尚紀〉/
宣満二公同日終（追悼甫水井上博士）〈北田 建二〉/ 遺言状〈出野 尚紀〉

第 3 章 人脈……43

陶淵明「飲酒其五」〈松本 剣志郎〉/ 高橋九郎宛 石黒忠悳書簡〈岩下 哲典〉/
高橋九郎宛 高橋友二郎・逸平書簡〈長谷川 彩〉/ 岩嵜祐五郎ほか宛 井上円了書簡〈田邊 幹〉/
哲学会雑誌（第 1 冊第 1 号～第 6 号 合綴本）〈竹中 久留美〉/ 吉凶禍福天主張〈出野 尚紀〉/
副島種臣の書〈北田 建二〉/ 森鷗外宛 井上円了書簡〈佐々木 悠里〉/ 井上円了像〈藤井 明〉/
青巒甫水慧雲三先生合作扇面〈池上 正男〉/ 男子幽霊図〈北田 建二〉/ 哲学堂来観諸君名簿 第 1 号〈出野 尚紀〉/
六賢人像〈出野 尚紀〉/ 哲学堂八景漢詩（南条文雄朱筆）〈出野 尚紀〉

資料編……59

井上円了 生涯と肖像……60
執筆者 / 写真提供・撮影……62

表紙：

井上円了写真（東洋大学井上円了研究センター蔵）／ 男子幽霊図（東洋大学井上円了研究センター蔵）／ たばこ入れ（カエル・蛇・ナメクジ、山崎記念中野区立歴史民俗資料館蔵）／ 哲学道中記（東洋大学井上円了研究センター蔵）／ 井上円了愛用の品（筆立て・筆置き、東洋大学井上円了研究センター蔵）／ 哲学飛将碁（東洋大学井上円了研究センター蔵）／ 閻魔像（山崎記念中野区立歴史民俗資料館蔵）

本扉：

井上円了肖像（東洋大学井上円了研究センター蔵）

裏表紙：

四聖像（東洋大学井上円了研究センター蔵）

表紙デザイン ＝ 高野 敦子（フリーランス・デザイナー）

謝辞

本書を作成するにあたり、下記のみなさまよりご協力を賜りました。 記して謝意を表します。
(五十音順、 敬称略)

小熊 よしみ（長岡市立中央図書館）
木村 修一郎
白川部 達夫（東洋大学文学部史学科教授）
福原 国郎（長岡高校記念資料館）
西田 泰民（新潟県立歴史博物館）
村山 弘

長岡市立中央図書館
日本体育施設グループ（哲学堂公園事務所）
文京区立森鷗外記念館
山崎記念中野区立歴史民俗資料館

東洋大学アジア文化研究所
東洋大学井上円了記念博物館
東洋大学附属図書館

凡例

○ 各資料の情報について、原則として以下の順に必要事項を記載した。
　・資料名
　・材質・技法 ／ 作者 ／ 年代 ／ 所蔵者名
○ 資料名は、所蔵者が付した名称とは異なるものがある。
○ 一部の資料については、翻刻・書き下し、参考図版等を掲載した。
○ 旧字・異体字は、原則として常用漢字を用い、合字は仮名で表記した。
○ 翻刻の体裁（改行、字送り）について、原則として原文通りとしたが、必要に応じて一字空けを施した。また、一部の資料については、読みやすさを優先し、翻刻者が適宜改行・読点の挿入を行った。
○ 資料中の振り仮名については、翻刻では傍線とともに当該箇所の後に（ ）を付して記載した。抹消箇所については■で記載し、文字が判読できるものは後ろに［ ］を付して補った。
○ 印記、花押については、［印］、［花押］と記載した。
○ 資料中の誤記については、翻刻では原文のまま記載し、傍線とともに当該箇所の後ろに〈ママ〉と記載した。
○ 資料の引用文・翻刻文中に、現在では使用を慎むべきとされる用語が見られるが、歴史的資料としての性質を考慮し、そのままで記載した。
○ 各資料の解説の末尾に、執筆者の氏名を（ ）を付して記載した。
○ 引用文中の〔 〕内は引用者の補足である。

東洋大学における井上円了の研究

東洋大学で組織的な井上円了研究が始まったのは、昭和53年（1978）である。それまでの研究の蓄積はなかったが、大学が研究費を出し、これに応募して、有志による井上円了研究会ができた。この研究会は3つの部会で構成され、第1部会は「井上円了の学理思想」、第2部会は「井上円了の西洋思想」、第3部会は「井上円了の国内における実証的研究」をテーマとしていた。前者の2つの部会は著作を対象とした研究であったが、第3部会は社会学と哲学の研究者で組織され、早速、生誕の地である長岡市での調査を開始した。新たな資料収集がはじまった。

その後、昭和54年から「『井上圓了先生の書』遺墨集とその研究」の組織が活動を始めて、遺墨の収集に着手した。同時期に、附属図書館によって井上円了の著書や資料が整理されるようになった。それまで一般書架に置かれていた円了の著書を、新たに設置した特殊資料室に集めて、残されていた手稿などとともに整理作業が開始された。

さらに、昭和54年4月に、東洋大学創立百周年記念事業委員会規程が施行され、昭和57年6月に東洋大学創立100年史編纂委員会規程が施行されて、100年史関係者による創立者・井上円了の資料収集も始まった。東洋大学では、昭和12年に『東洋大学創立五十年史』、昭和42年に『東洋大学八十年史』が刊行されたが、2回の編纂資料は散逸して継承されなかったので、100年史の資料収集をゼロから始めなければならないという事情があった。そのため、資料収集と同時に関係者からの聞き取り調査も行われた。

昭和62年、東洋大学は創立100周年を迎えた。それまでの円了の研究組織はその成果をまとめて刊行を終えて解散したが、100年史の関係はその一部が刊行されただけで、編纂を継続しなければならなかった。

平成2年（1990）、「伝統の堅持と歴史の創造」を掲げた塩川正十郎理事長の主導で、法人立の「井上円了記念学術センター」が設立され、円了の研究と100年史の編纂の2つの組織は統合され、それまで収集された資料は新たな組織に継承されることになった。また、平成17年には井上円了記念博物館が設立され、資料を展示・公開する機関が誕生した。そして、平成26年に教学組織の常設研究機関として「井上円了研究センター」が設立された。長年にわたって収集された資料はここに集約され、それをもとに研究活動が継続されることになった。

今回、円了没後100周年を記念して、収集された資料のなかから、特別なものを選別して、1冊のカタログが解説文つきで刊行されることとなり、先人の取り組みに感謝するとともに、カタログの企画・編集を担当された方々に謝意を表したいと思います。

（三浦 節夫）

第1章

思想

寺院に生まれて少年期に漢学、青年期に西洋の諸学を学び、仏教の変革と社会の改良を志す啓蒙家として活躍した哲学者、また「妖怪博士」としても著名な円了の思想展開をたどります。

001

四聖像

⊙絹本着色、掛幅　⊙橋本雅邦画　⊙明治 20 年代
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

向かって右側から、ソクラテス、釈迦、孔子、カントが描かれた異色の集団肖像画である。井上円了の依頼に応じて、日本画家・橋本雅邦（1835-1908）によって制作されたもので、画面右下に朱文重郭方印「雅邦」が捺されている。本図は『雅邦翁墨妙集』に戴録されており、雅邦作品の愛好団体・生輝会が主催した第1回橋本雅邦翁絵画展覧会（明治 32 年）にも出品された。

本図は円了の哲学観を象徴する作品であり、釈迦と孔子が東洋を、ソクラテスとカントが西洋を代表する「哲学者」として描かれている。図像的に見ると、釈迦は「出山釈迦図」、孔子は「行教像」の像容で描かれており、江戸狩野派に学んだ雅邦にとっては馴染み深い、東洋絵画の図像伝統に立脚したものである。他方、ソクラテスとカント像は、雅邦にとって未知のものであり、円了の示唆なくしては制作が困難だったにちがいない。本図の下絵が『雅邦素草稿集』に掲載されており、四聖の面貌描写には特に注力していた様子がうかがわれる。

異なる宗教や思想の聖賢が同一画面内に描かれる画題としては、儒仏道の「三教一致」思想に由来する「三酸図」や「虎渓三笑図」などがある。しかしそうした画題では、画中の人物が共同で一つの物語を形作るのに対し、あくまで本図は四聖の肖像画として描かれている。そのため、四聖は互いに視線を交わすこともなく画面内に並立している。雅邦は明治 20 年代前半に、円了が学生時代に薫陶を受けたアーネスト・F・フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa 1853-1908）や、岡倉覚三（天心 1863-1913）の主導した日本画革新運動に参加した経験があり、本図のような「新奇」とも言える画題に柔軟な思考を働かせることができたのであろう。

ところで、本図に先行する洋画家・渡辺文三郎（1853-1936）の《四聖像》（所在不明、明治 18 年）があり、同図には中村正直（敬宇 1832-1891）が賛を寄せている。渡辺の《四聖像》は、四聖の上半身のみを描いたもので、人物表現としては稚拙さが残る。哲学館と哲学祭の拡張を企図していた円了にとって、自己の思想を象徴し、かつ祭祀の要となる本格的な尊像が不可欠となり、改めて雅邦に本図の制作を依頼したのかもしれない。円了と雅邦の接点については詳細不明だが、円了は、他に雅邦の《山水図》（東京富士美術館蔵、明治 31 年頃）も所有していたことがわかっている。

なお、本図の制作年については諸説ある。本図の紙背に「明治弐十三年秋□　橋本雅邦翁筆　井上円了所蔵　哲学堂内ニ掛ラルモノトス」（□は難読字）の墨書があるが、筆記者は不明である。本図が雑誌『東洋哲学』第 2 編第 1 号に掲載された明治 28 年（1895）が制作年の下限になるのは間違いなく、円了の『南船北馬集』第 3 編では、明治 26 年から 27 年に本図の揮毫を依頼したと回想している。本図の抑制が効いた筆線や色彩表現を考慮すれば、明治 20 年代半ば以降に制作されたものと見なすのが穏当だろう。

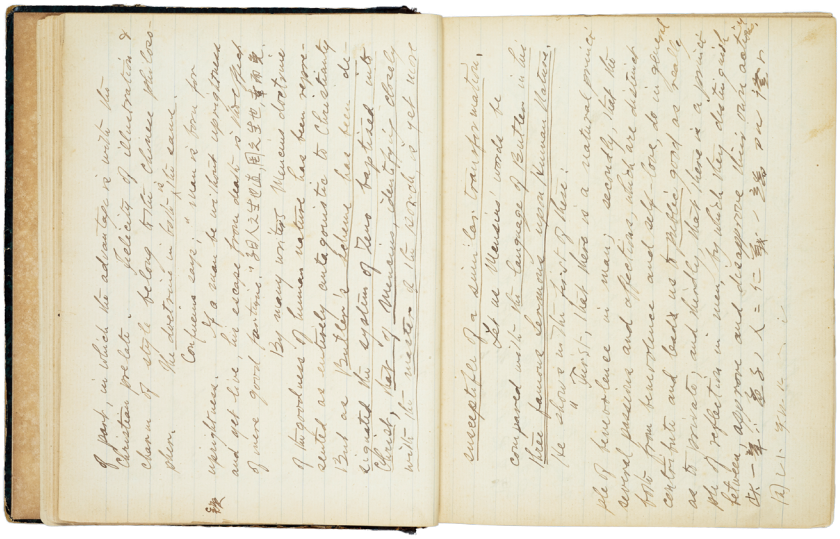
（田中 純一朗）

参考：《四聖像（複製）》
（渡辺文三郎画、中村正直賛、明治 18 年〔原画制作〕）

002

稿録

⊙井上円了筆　⊙明治 16 年（1883）
⊙東洋大学附属図書館蔵



「明治十六年秋 稿録 文三年生 井上円了」と表紙に書かれた手書きのノートは、昭和 48 年（1973）に東洋大学附属図書館の未整理資料の中から発見されたものである。『稿録』と通称されているこのノートは、東京大学哲学科に在籍していた井上円了の自習ノートであるとみなされている。円了研究者であるライナ・シュルツァによれば、『稿録』は主に当時の東京大学図書館に所蔵されていた英語文献からの抜粋と、書籍名の目録などによって構成されている（ライナ・シュルツァ「井上円了『稿録』の研究」、『井上円了センター年報』第 19 号）。そこには、実に 59 冊の文献の抜粋と、およそ 220 冊にも及ぶ洋書名が挙げられており、東大時代の円了の学習を具体的に示す貴重なドキュメントとなっている。

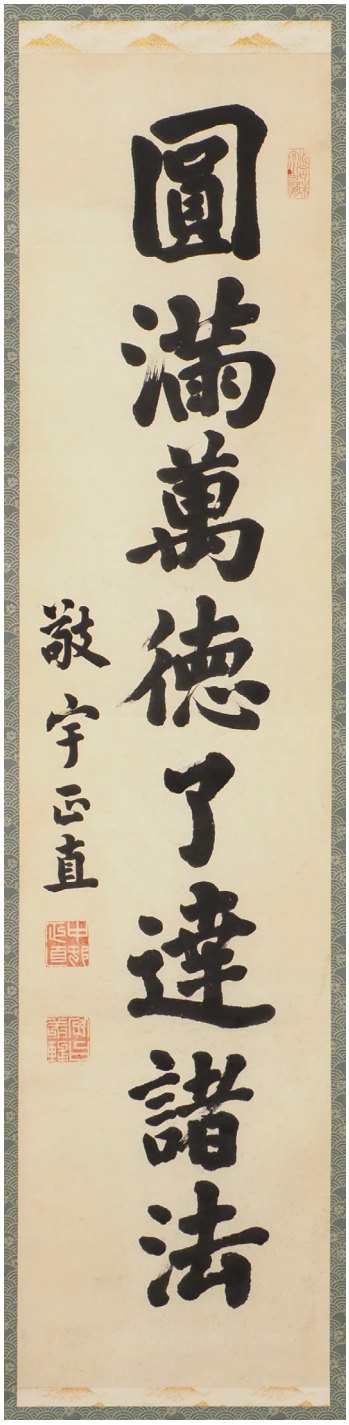
そして近年では、『稿録』の内容にも詳しい分析が進められている。ともすれば従来、円了が東大で学んだのは主に「西洋哲学」であったという漠然としたイメージがあったが、『稿録』の中で参照されているのは、科学や心理学、生物学、歴史学など多様な学問分野にわたっており、また当時広い意味での「哲学」に分類されていたものの中にも、倫理学（当時「モラル・サイエンス」と呼ばれたイギリス系の倫理思想）や宗教学、人類学、社会学、論理学等々に関わる様々な文献が含まれている。また、さらに言えば、当時欧米で盛んになっていた東洋学についての学習の痕跡も見られる。先に挙げたシュルツァの研究をはじめとする『稿録』についての詳細な研究は、ややステレオタイプ的に理解されがちであった円了の「西洋哲学受容」のイメージを、今後大きく変化させる可能性を帯びている。

（長谷川 琢哉）

003

円満万徳了達諸法

⊙紙本墨書、掛幅　⊙中村正直書　⊙明治 10 年代か
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



哲学館の三恩人のひとり、加藤弘之（1836-1916）と同じく、明六社を経て東京大学で教授をつとめた中村正直（1832-1891）は、明治初期に西洋思想・精神の紹介者として、若者たちに大きな影響を与えた。井上円了もその影響を受けたひとりで、長岡の洋学校（新潟学校第一分校）在学中には、中村の訳著『西国立志編』を読んでいる。東京大学文学部哲学科に入学した後、円了は中村が担当していた漢文学（易論）の講義を聴講しているが、マンツーマンで行われたこの講義を通して、ふたりの交流は「普通の師弟の関係以上に親密」なものになったという（井上円了「理想の円了」、『東洋哲学』第 13 編 4 号、1906 年、pp.291-292）。

円了が中村との交流を重ねるなか、ある日、中村の自宅を訪れた際、「円了」の意味を尋ねられたことがあった。これに対し、「円満万徳、了達諸法」（円は「万徳を円満す」、了は「諸法を了達す」を表す）と答えたところ、中村はこの言葉を気に入り、その場で書を揮毫して円了にプレゼントしたという（『東洋哲学』第 13 編 4 号、pp.291-292、および井上円了「円了随筆」、『井上円了選集』第 24 巻、東洋大学、2004 年、p.76）。

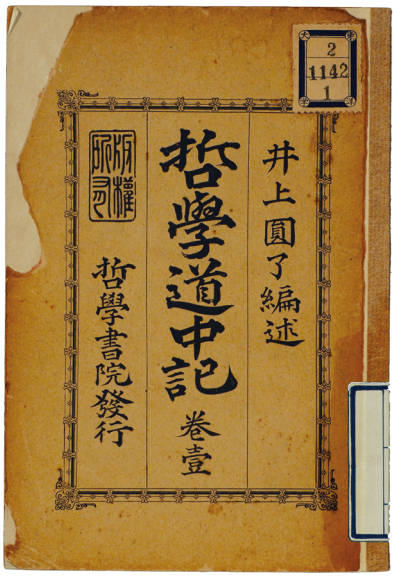
本作は、このとき制作された書で、円了が長らく大切に保管してきたものである。円了にとっては、自分の名の由来（実はその場のアドリブで自ら考案したもの）を記したものであるとともに、「名前の如く正直で今聖人」（『東洋哲学』第 13 編 4 号、p.291）と語るほどに敬愛した中村との思い出のよすがとなる大切なものだったのである。

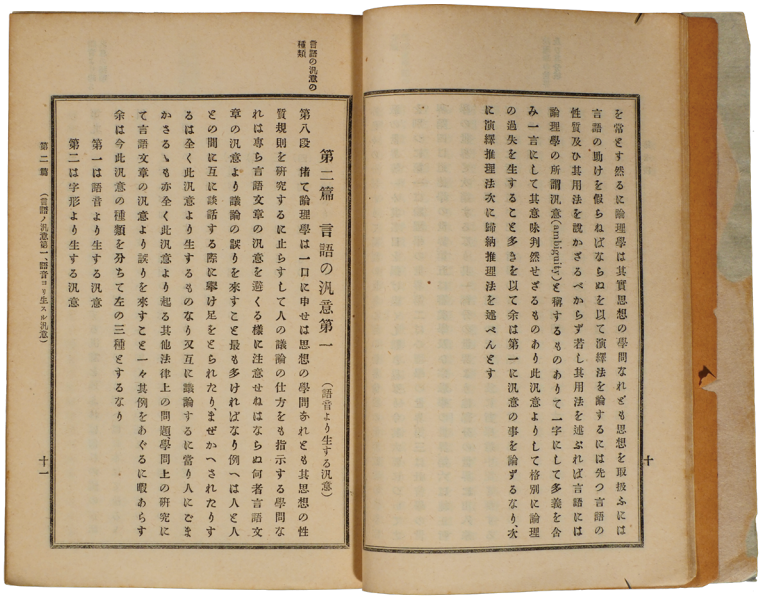
（北田 建二）

004

哲学道中記

⊙井上円了著、哲学書院発行　⊙明治 20 年（1887）6 月初版発行
⊙東洋大学附属図書館蔵





井上円了の「跋」によれば、本書は脱稿時に経済学者として知られる土子金四郎（1864-1917）と、人類学者の坪井正五郎（1863-1913）にチェックを受け、より内容を充実させたものである。発行元の哲学書院は、明治 19 年（1886）の秋、円了が東京大学在学時代に設立した「哲学会」の同志である棚橋一郎（1863-1942）と相談し、哲学書の普及を中心とした出版社の設立を計画したもので、その翌年の1月に設立された。『哲学会雑誌』がここから創刊されたほか、13 年間にわたり活動の拠点のひとつとなった。

本書は 5 編全 53 段からなり、論理学は哲学界の関門であり、哲学道中のふり出しと捉える観点から、「一字にして多義を含み一言にして其意味判然せざるもの」としての「汎意 (ambiguity)」（井上円了『哲学道中記』、哲学書院、1887 年、p.10）を主要テーマとする。円了によれば、汎意は語音から生ずるもの・字形より生ずるもの・連想より生ずるものの3種に大別される。語音とは、たとえば流れる川も獣の皮も「かわ」というように、同音異義語のことであり、字形とは、音楽の「楽」と歓楽の「楽」は同じ字のため、意味が判別し難くなることである。また連想とは、サイレンを聞いて火事を連想するように、日常に近いものから起こされる付近連想と、舞い落ちる枯葉を見て人生の無常を思うように、性質の類似から喚起される類同連想のふたつがある。そしてさらに、この類同連想は、正直者を「仏」と呼び、狡猾な人間を「狐」と呼ぶような性質の類似したもの、悪寒と「風」のように性質と様子が類似したもの、また美人のことを「卵に目鼻」と呼ぶような、形態が類似したものに分かれる。

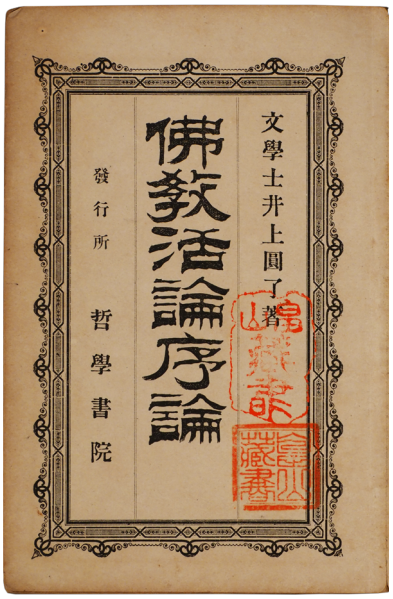
このように本書からは日常卑近の言葉遣いに関する円了の犀利な観察眼をうかがうことができる。ただ、「巻壱」と記されているにもかかわらず、ついに続編は書かれることがなかった。本書から円了の書かれざる論理学について考えてみることも、興趣があることかもしれない。

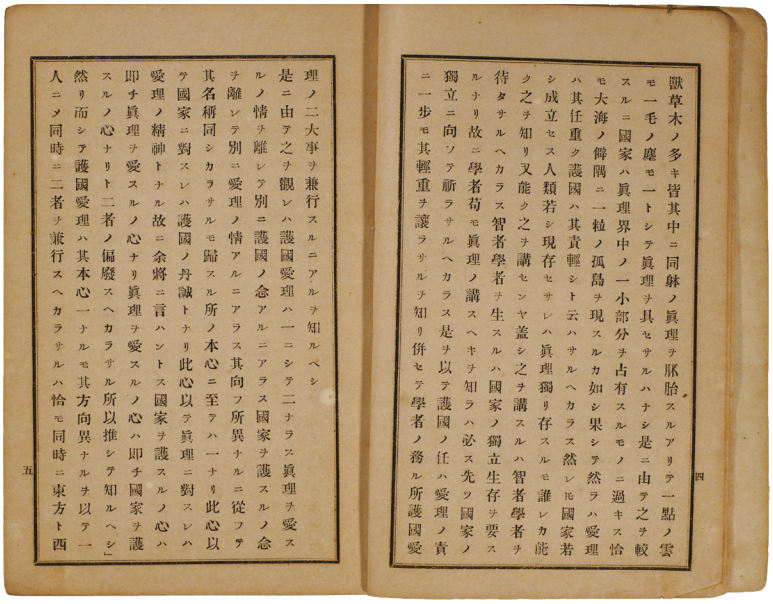
（甲田 烈）

005

仏教活論序論（初版本）

⊙井上円了著、哲学書院発行　⊙明治 20 年（1887）2 月発行
⊙東洋大学井上円了記念博物館蔵





『仏教活論序論』は井上円了の代表的な著作である。目次はないが、内容から①「国家と真理」、②「国家と宗教」、③「真理と宗教」の 3 部に分けられる。①「国家と真理」は、「人誰か生まれて国家を思わざるものあらんや、人誰か学んで真理を愛せざるものあらんや」（井上円了『仏教活論序論』初版、哲学書院、1887 年、p.1）から始まり、これは名文として知られる。その後、国家を護ること、真理を愛することが両立するさまを「護国愛理」の 4 文字で示した。これは戦前の一時期、東洋大学の校是となったものである。②「国家と宗教」では日本という国家と宗教の関係について、キリスト教と仏教とを対比して、仏教こそが日本の歴史とともにあり、将来宗教をキリスト教に変えてしまうならば日本は日本でなくなるとまで言い切る。③「真理と宗教」では、円了が真理と考える西洋哲学の原理と合致する宗教が仏教であることを述べる。このように本書では国家、真理、仏教という 3 項が分かちがたく結びついており、円了思想の中核をなす。

本書の初版本は明治 20 年（1887）2 月に刊行され、3 か月後の同年 5 月には早くも再版が出された。明治 21 年 4 月には訂正版が刊行されている。『井上円了選集』第 3 巻に収録されているのは訂正版である。初版本と訂正版との違いは、キリスト教や仏教の僧侶を激しく批判する部分など、過激な部分が削除され、国家の独立に関する部分など、補充の説明が必要な部分が追加されている。

本書は、その後に『仏教活論本論』の三部作、『破邪活論』、『顕正活論』、『護法活論』の刊行を予告した。前二者は刊行されたが、最後の『護法活論』は晩年に『活仏教』というタイトルで刊行された。

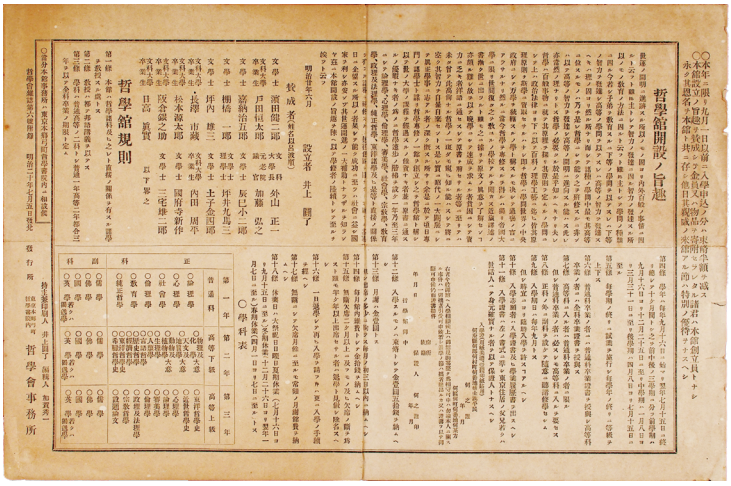
本書の意義は、第一に、明治初めの廃仏毀釈により沈滞していた仏教界を奮起させたことである。第二に、伝統思想である仏教を新しい西洋哲学を尺度として再評価する方法が斬新であった。

（佐藤 厚）

006

哲学館開設ノ旨趣（哲学会雑誌 第6号 付録）

⊙井上円了著、哲学会事務所発行　⊙明治 20 年（1887）7 月 5 日発行
⊙北田建二蔵



私立学校「哲学館」の創立を決意した井上円了は、明治 20 年（1887）に新聞・雑誌に文章を発表して、世に告知している。これまで集まった資料を月日の順に紹介しておこう。

① 哲学館の開設を最初に知らせたのは、明治 20 年 6 月 28 日の仏教系新聞『明教新誌』である。同紙の「新誌」の欄に「〇哲学館 文学士井上円了君は世の大学課程を経過するの余資なき者並に原書に通する優暇なき者の為に……」に始まる記事で、修学の年限や主な科目、入学金、月謝、連絡事務所、賛同者名を述べ、最後に「哲学館開設の旨趣」の全文が掲載されている。

② 7 月 5 日の『哲学会雑誌』第 6 号には「哲学専修哲学館開設広告」が本館設立者井上円了の名で出されているが、これは「開設ノ旨趣」の後段と入学申込の文章で構成されたものである。

③ 9 月 5 日の仏教系雑誌『教学論集』第 45 編は、「哲学館開設旨趣」のみが掲載されている。

このようにみると、東洋大学の正史にあたる『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』（pp.83-84）は、③を収録しているが、これは開設予告の全文ではないという問題があった。

ここで紹介する資料は、近年において井上円了記念博物館の北田建二学芸員が発見したものである。『哲学会雑誌』第 6 号の附録として、円了によって印刷されたこの資料は 2 点の特徴をもっている。

第 1 点は、「哲学館開設ノ旨趣」の全文が掲載されている。この文章を①と③で比較検討したところ、完全に一致していることがわかった。のみならず、それについで賛成者 17 名の肩書と氏名が明らかにされ、さらに学科表を含む「哲学館規則」が記されていることである。これらの内容から考えて、この資料は哲学館開設の正式な予告文書の一つと判断される。

第 2 点は、資料の右端に、小さく書かれている二つの文章である。そのうちの一つは創立寄付金の募集に関するものである。哲学館は円了が個人で創立した学校であるが、その経費については明治 22 年 11 月 13 日の「私立哲学館移転式」における館主井上円了の演説で、「之〔哲学館〕ヲ創立セシトキニハ固ヨリ無資本ニシテ他ヨリ毫モ扶助保護ヲ受ケタルコトナク全ク有志ノ一時ノ寄付ニヨリテ創立費ヲ支弁シ……哲学館ハ二百八十人ヨリテ設立シタルモノ」と述べていた。

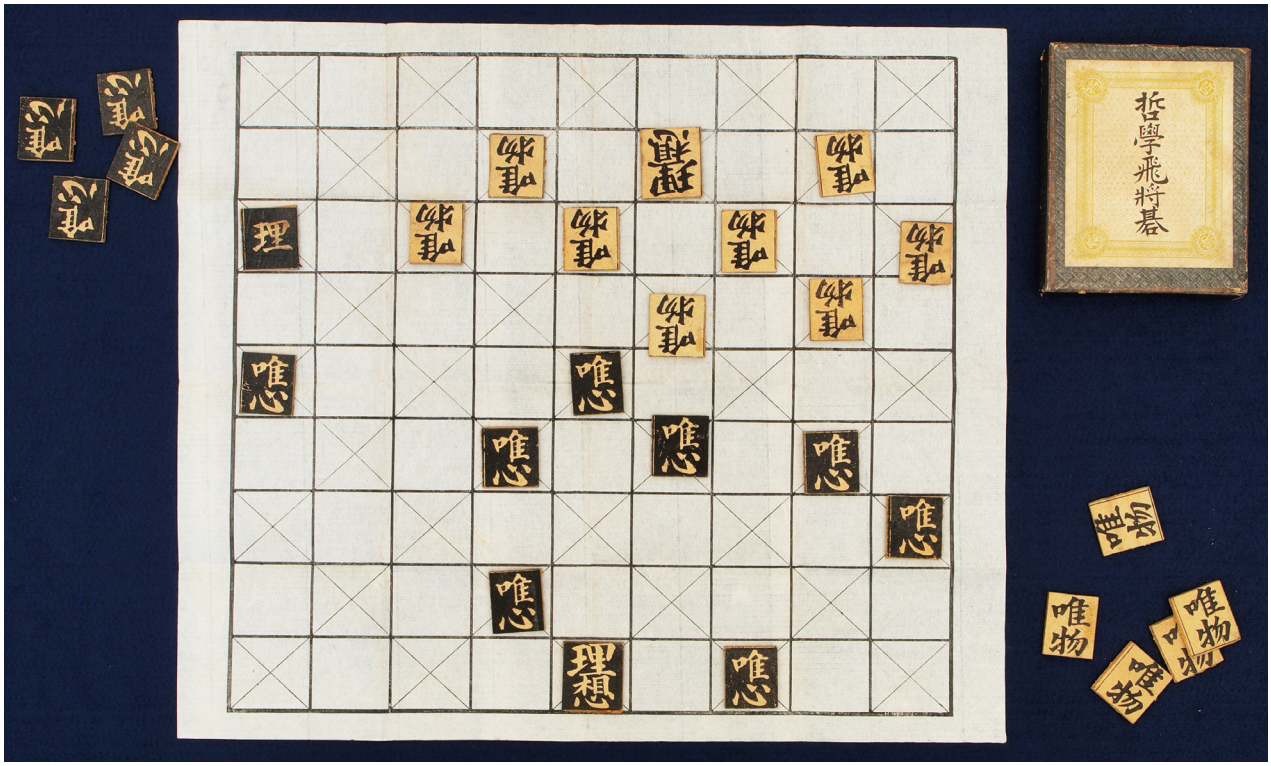
ところが、その寄付を募集した文書はこれまで未見であった。北田氏の発見したこの文書によって、円了が多くの人々に寄付を呼びかけていたことが判明したのである。

（三浦 節夫）

007

哲学飛将碁

⊙井上円了考案、哲学書院発売　⊙明治 23 年（1890）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



哲学の通俗化と実行化を目指した井上円了が、遊戯を通して真理を探究する精神を一般に普及するために考案したボードゲーム。飛将碁と名づけられているのは、2 陣に分かれた相手方の駒（票）を飛び越すことによって、手駒を取り合うからである。

円了のアイデアを丸山福治がまとめた「指南」によれば、この将碁の目的は次のようなものである（丸山福治編『哲学飛将碁指南』、哲学書院、1890 年、p.1）。

> 此碁の目的は教育上哲学の名称を教授する一助となるにあればその票称は哲学上の定語を用ひ黒票は唯物、白票は唯心、主票は理想の称を用ひ相争ふも論理上の争なり其勝敗あるも論理上の勝敗なり

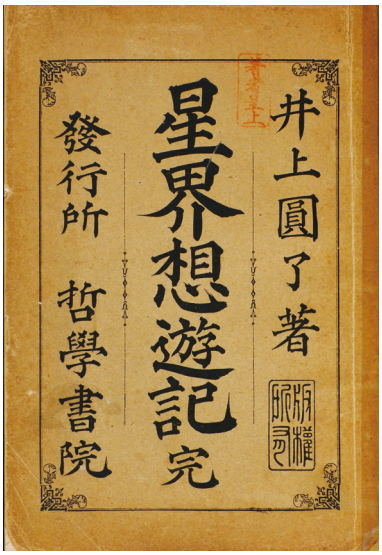
白黒2種の区分は「白黒二派」と呼ばれ、それぞれの票は「票員」と呼ばれる。将棋の王将のような位置づけにある、両派の主票は「主員若くは派主」と称し、他の「属票」は「属員若くは派属」と呼ばれるなど、思想的な立場の相違と哲学的な論争を体感するボードゲームになっている。最初は前方にしか進めない属票は、相手側の一番奥まで進むと将棋の歩兵のように裏返り、主票と同じように後方に進むことができる。唯物や唯心の探求が限界点まで進んで「理」に達すると、より自由な思考ができるようになるのである。こうしたところにも、円了のユーモアと思索の深さが感じられる。

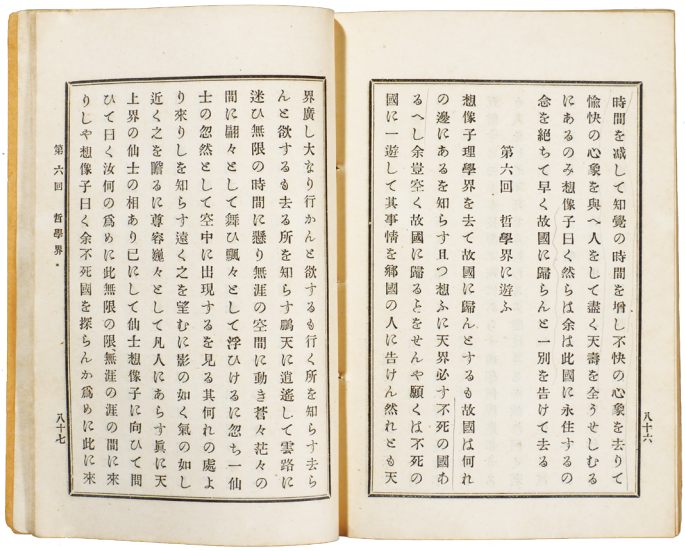
（岡田 正彦）

008

星界想遊記

⊙井上円了著、哲学書院発行　⊙明治 23 年（1890）2 月 24 日発行
⊙東洋大学附属図書館蔵




時間を減して知覺の時間を增し不快の心象を去りて愉快の心象を與へ人をして盡く天壽を全うせしむるにあるのみ想像子曰く然らば余は此國に永住するの念を絶もて早く故國に歸らんと一別を告けて去る

第六回　哲學界に遊ふ

想像子理學界を去て故國に歸んとするも故國は何れの邊にあるを知らす且つ想ふに天界必す不死の國わるへし余豈空く故國に歸るとをせんや願くは不死の國に一遊して其事情を鄉國の人に告けん然れとも天

八十六

界廣し大なり行かんと欲するも行く所を知らす去らんと欲するも去る所を知らす鵬天に逍遙して雲路に迷ひ無限の時間に懸り無涯の空間に動き蒼々茫々の間に翩々として舞ひ飄々として浮ひけるに忽も一仙士の忽然として空中に出現するを見る其何れの處より來りしを知らす遠く之を望むに影の如く氣の如し近く之を瞻るに尊容巍々として凡人にあらす眞に天上界の仙士の相あり已にして仙士想像子に向ひて問ひて曰く汝何の爲めに此無限の限無涯の涯の間に來りしや想像子曰く余不死國を探らんか爲めに此に來

第六回　哲學界

八十七

本書は井上円了が修善寺温泉逗留中に見た夢中の空想をもとに書き上げたという、異界遍歴譚の形をとった思想小説である。

主人公の「想像子」は深夜独り思索するうちにまどろみ、夢の中で地球と同じような国土が無数に点在する「星界」へと到る。そこで彼は不老不死の極楽世界を求めさまよい、家族制さえ存在しない完全な共和制の「共和界」、経済原理のみで治まる「商法界」、女尊男卑の「女子界」、高齢であるほど社会的地位が高まる「老人界」、誰もが学者であり科学力に秀でた「理学界」を順に訪ねるが、不死は得られず、またどの政体にもそれぞれの「圧制」があることに失望して去る。最後に行き着くのが「哲学界」であり、まさしく死はおろか一切の苦が存在しない永遠の理想世界であるが、そこで出会った釈迦・孔子・ソクラテス・カント（円了の尊崇した「四聖」）から、まず地上世界において社会的な義務を果たすべきであり、そのように生を全うした者だけが「哲学界」に住むことができると諭され、もとの一室で目覚めるのである。

ユートピア思想の小説的表現としては、円了とも会っていた康有為（1858-1927、本書 p.25 参照）の『大同書』（1902 年頃成）への影響関係が指摘されている（坂出祥伸『改訂増補 中国近代の思想と科学』朋友書店、2001 年）。また、各世界は当時の日本より未来の発展段階として論じられ、明治期に流行した SF 小説との関連もうかがえる（横田順彌『近代日本奇想小説史 明治篇』、Pilar Press、2011 年）。西欧では J・スウィフト（Jonathan Swift 1667-1745）の『ガリバー旅行記』（1726 年刊）や、ヴォルテール（Voltaire 1694-1778）に代表される 18 世紀の哲学小説の多くも、異界・異国への旅を思考実験と社会風刺の手段としてきた。一方、平賀源内（1728-1780）の『風流志道軒伝』（1763 年刊）に始まる江戸期の異界遍歴譚の系譜も考慮すべきであろう。とくに登場人物間の対話を通じて老荘的教訓を語る遊谷子の『異国奇談和荘兵衛』（1774 年刊）は明治期にまで及ぶ多くの追随作を生み、『星界想遊記』とも重なる点が少なくない。

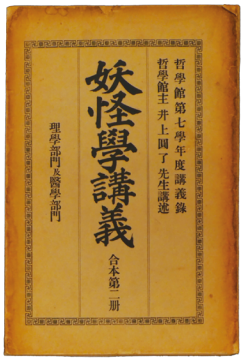
国文学者の関根正直（1860-1932）は、円了の妖怪学が江戸期に多数刊行された通俗教訓書に似て、学者として重要な社会的役割を果たしているのだと賞賛する（『通俗絵入 妖怪百談』巻末）。哲学の通俗化・実践化を目指した円了にとって、我が意を得たりというところだろう。この思想小説もそうした工夫のひとつと考えられ、実際に江戸期の教訓小説を参考にした可能性は高い。円了は他にもよく知られた文書のパロディや歌といった様々な表現形式を試みており、今後再評価されていくべき一面である。

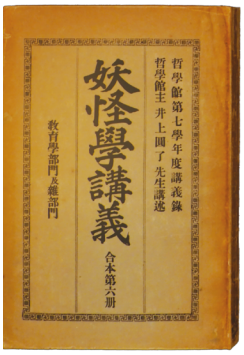
（井関 大介）

009

妖怪学講義 （合本第 1 冊～第 6 冊）

⊙井上円了著、哲学館発行　⊙明治 29 年（1896）6 月 14 日発行
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵





大著であり、妖怪博士・お化け博士と通称される井上円了の名を不動のものとした代表作。その初出は明治 26 年（1893）11 月 5 日の『哲学館講義録』から「第 7 学年度妖怪学」として開始され、翌年の 10 月 20 日にかけて 48 回にわたり掲載されたものであり、本書はそれを全 8 巻全 6 分冊の合本としたもの。本書の最大の特徴としては、その広大な文献渉猟にある。日本・中国・インド（仏典）を中心に明治期の新聞・雑誌を合わせるとそれは 1640 余に達し、内容も天文・地誌・医学から怪談・異聞・紀行文・故事来歴・語源などに及んでいる。そして思想的には西洋哲学への言及はもちろんのこと、仏教・儒教・神道・道教と広範にわたる。それに加え、明治 23 年から 26 年にかけての第 1 回全国巡講によるフィールドワークの成果や、『実地見聞集』といったノート類も生かされている。『妖怪学講義』は円了の生前も版を重ね、明治 30 年には明治天皇に奉献されて、天皇はこれを愛読したと言われている。戦後には昭和 62 年（1987）から東洋大学で刊行された『井上円了選集』（第 16 巻～第 18 巻）に収録されるに至った。

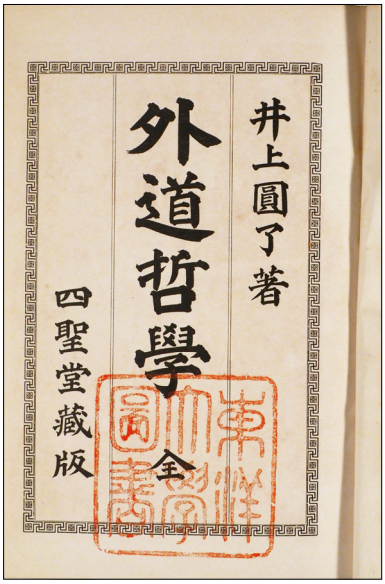
内容は緒言・総論、理学部門、医学部門、純正哲学部門、心理学部門、宗教学部門、教育学部門、雑部門の 8 部門から構成されている。円了は自然現象によって実際に発生する異常現象を「仮怪」、誤認や恐怖感による錯覚によって生じる現象を「誤怪」、利欲や権謀術数といった人間の意図によって生ずるものを「偽怪」に分類し、さらに仮怪は物理的に解釈できる各種の異常現象である「物怪」と、幻覚・妄想や異常な精神現象から生ずるものを「心怪」に大別できるとしている。これら以外に、物質や精神の本源であり、世界そのものの不思議である「真怪」があるとしている。真怪以外の妖怪については諸学によって分析できるが、真怪についてはその認識のために坐禅・観法を奨励しており、近代合理主義の立場による迷信打破のみを目的としていたのではないことは注目に値する。

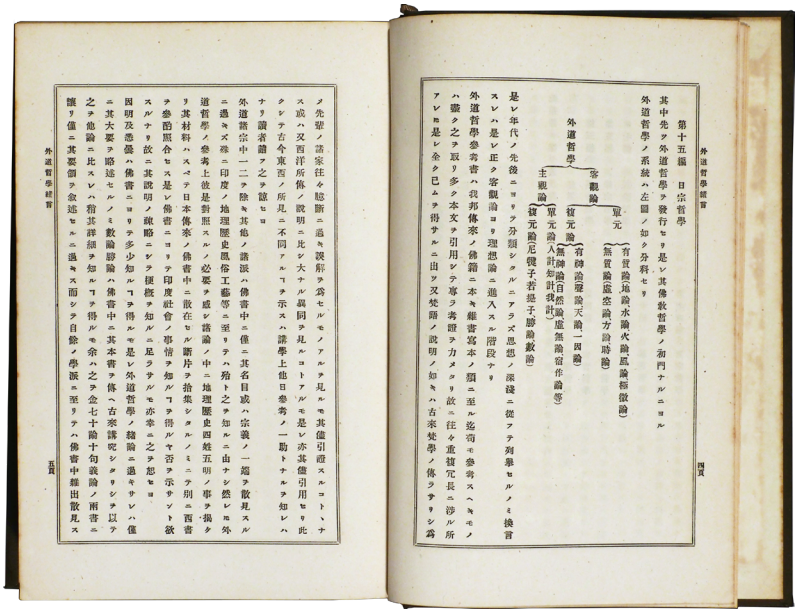
（甲田 烈）

010

外道哲学

⊙井上円了著、哲学館講義録出版部発行　⊙明治 30 年（1897）2 月 22 日発行
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵





緒言によれば、井上円了は、日本仏教の組織系統を撰述しようと企図し、「仏教哲学系統論」と題して、これまで誰も行なわなかった日本仏教の全歴史と全思想を余すところなく語ろうとした。近代欧米のアジア研究は参考とせず、これまでに日本で翻訳・刊行された文献を中心に、明治維新以前、もしくは神仏分離令以前の仏教を分類し、インドと中国の思想がどこまでであり、どこからが日本独自の仏教であるかを分析しようとしたものである。

この『外道哲学』は、「仏教哲学系統論」の第 1 編として、インドで生まれた仏教以外の思想が、仏教にどのように取り入れられたのかを明らかにしようとしたものである。その宗派分類には、日本の伝統的な分類法だけでなく、ヨーロッパ哲学の分類法を援用した部分が見られるオリジナルなところがある。そして、仏教も含めた 5 つの因明の検討のほか、国土、学派、思想、時代の分類を行っている。

インドの古典学問については、いわゆる六師外道と足目（アクシャパーダ）、迦毘羅（カピラ）の学説を仏教典籍から分析している。そして、インド神話については、外道がどのように仏道に従ったかという面を記している。

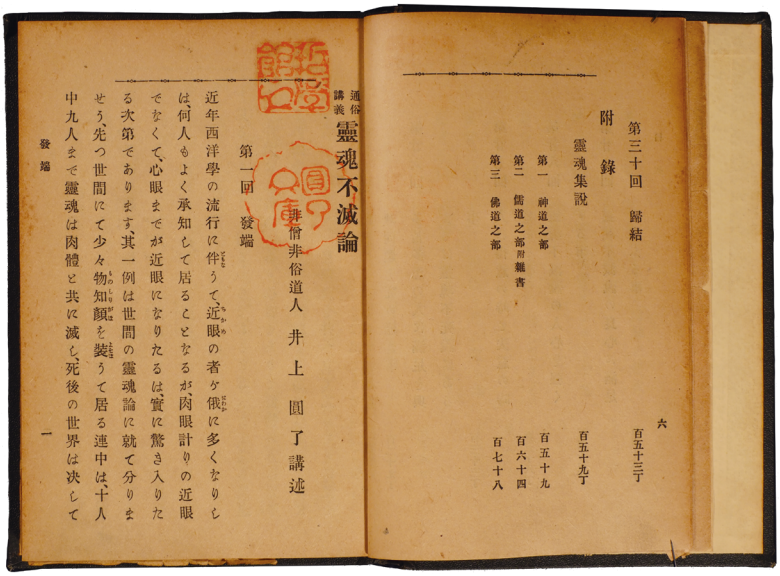
本書では、日本で仏典を通してインドの外道がどのように説かれてきたのかを明かしているのみであり、当時ヨーロッパに伝わっていた中世以降のインド思想については記述されていない。しかし言い換えれば、西洋の学問が入る以前の日本人が、インドの仏教以外の思想をどのように理解してきたのかを系統立てて解析したものといえ、その唯一の書と称しても過言ではない大著である。

（出野 尚紀）

011

通俗講義 霊魂不滅論（付 霊魂集説）

⊙井上円了著、小立鉦四郎（南江堂書店）発行　⊙明治 32 年（1899）4 月 27 日発行
⊙東洋大学附属図書館蔵



本書に先立って明治 31 年（1898）に四聖堂から公刊された『破唯物論』が専門性の高い著作だったのに対して、より一般読者の求めに応じて著述された。ベースは有志の請いによって行われた談話であり、全編が親しみやすい語り口調となっている。井上円了の著作の中では読みやすい部類に入るせいか、昭和 58 年（1983）には新編妖怪叢書の1冊として国書刊行会から再刊され、その4年後には独立した 1 書として「霊魂集説」を割愛した形でやはり国書刊行会から刊行されている。そして割愛された部分も含めた形態としては、昭和 62 年から東洋大学で刊行された『井上円了選集』の第 19 巻に収録されるに至った。

『霊魂不滅論』の本編は全 30 回からなり、附録の「霊魂集説」は神道の部、儒教の部（付雑書）、仏教の部からなる資料集となっている。本編の 21 回までは、その当時に自然科学の2大法則として知られていた物質不滅の法則（質量保存の法則）と勢力恒存の法則（エネルギー保存の法則）をてこにして唯物論を批判し、円了自らが確信する「霊魂不滅」を理論的に解き明かすものとなっている。その基軸にある思想は、無から有は生じないというものである。たとえば個体が液体となり、そして気体となって物質の形状は変化したとしても、物質そのものとしては無に帰するものではないように、宇宙の本体とともに生まれ、仮に現在人間の精神という形をとっている霊魂もまた、宇宙とともに変化を続けながらも、不生不滅なのである。このような円了の霊魂論が、個体の人格的な「霊」の不滅を前提にしてはいないことは注目に値しよう。円了はこのような意味での「幽霊」は激しく否定している。

ただし、円了はこうした「霊魂」不滅の原理を第 22 回以下で現実の人生問題に応用することを忘れない。もし霊魂が不滅であるとすれば、それは人生に苦しむ人や失意の者たちに希望を与えるであろうと説く。雄大な構想に裏打ちされた人生哲学を垣間見ることができる。

（甲田 烈）

012

心字木魚

⦿木
⦿山﨑記念中野区立歴史民俗資料館蔵

手前のハート型の木製品が「心字木魚」。奥の石柱は四聖堂の「本尊」として安置された「唱念塔」で、その柱部分には「南無絶対無限尊」が、土台部分の各面には四聖を表わす「孔」「釈」「瑣」「韓」の 4 字が彫られている。

明治時代の国字改良論争において、井上円了は漢字文化を弁護する学者を代表する一人であった。円了は「言語文字は直接に人の精神思想に関連」（『漢字不可廃論』、四聖堂、1900 年、p.28）するものであるという信念を持ち、「語声のみで我々の精神界に保たれ居るでなく、其文字の形と共に、脳中に印象して存するものである」（同 p.30）と主張する。それゆえ、もし漢字を廃止すれば、日本が「暗黒時代」になってしまうというほどの文化的損失が生じると警告するのである。また、「文字の研究に就ては、世界中に漢字程面白きものはなかろう」（同 p.37）と、漢字の利点や文化としての特殊性を多角的に論じ、学習が困難で教育普及の妨げになるという漢字排斥論者の説得力ある懸念に対しても、漢字を教える方法の調査や改良を求め、自身でも様々にユニークな発案をしている。

上述のように、「我々の一念一思、皆其字形と連帯して我胸中に留まるものである」（同 p.43）という漢字文化圏の特徴を、円了は強く意識していた。その証拠の一つは、円了が自ら設計した自身の墓である。「井」の字にかたどった石の「上」に「円了」を象徴する「〇」形のディスクが置いてある。もともと「絵文字」、または「象形文字」であった漢字は「文字其物に美術的趣味を有する」（同 p.38）と、その美術的価値をも高く評価していた円了は、自身の漢字論を後半生の傑作である哲学堂公園の設計にも活かしている。字形と観念が切り離せないことを示すため、日本の伝統的な造園のモチーフである「心字池」と対になるように、「物」字形にかたどった「物字壇」も作ったのである。それらが位置する「唯心園」と「唯物園」のコンテクストでは、「心」の字がいわゆる精神の意味を持つ。

また、「心」がもともと心臓の象形に由来する文字であることも、円了は当然知っていたはずである。現在は中野区立歴史民俗資料館に保存されているが、四聖堂の床の中心に立てられている唱念塔の前に、かつては「♡」形の木

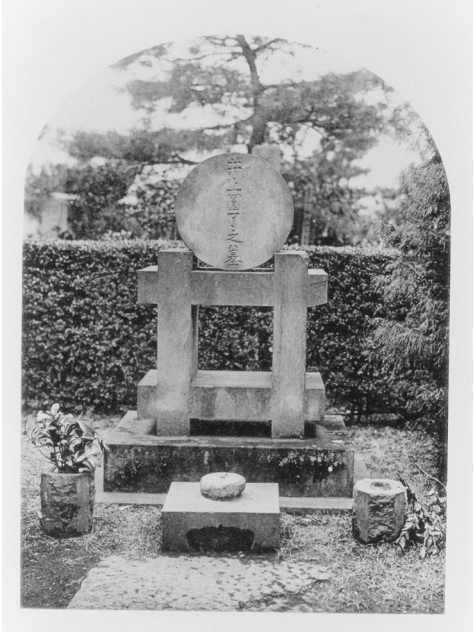
四聖堂内部

四聖堂外観

鼓が置いてあった。この木鼓の表面には「心」の字が彫られている。西洋のハートシンボルを引用して「心」の字源を示すことによって、円了は西洋の文字文化と漢字文化を対照的に示すことができた。西洋文明は、漢字とは違ってアイコンを文字化しなかったのである。

このハート型の木鼓に見られる美術的工夫は、それだけに止まらない。読経・念仏などの仏教の儀礼で使用される体鳴楽器、つまり木魚を転じて作成されたものであり、それゆえ、現在は「心字木魚」と呼ばれている。「南無絶対無限尊」という円了自身が考案したマントラは、同様に「心字木魚」を打ちながら唱えるべきであり、そうすることで安心をもたらすものであったと思われる。円了のデザインした心の鼓による鼓動は、実際に修行者の心臓の脈拍を安定させることも不可能ではなかっただろう。このような唱念の方法は、円了が考えた「道徳山哲学宗」としての哲学堂公園の瞑想的実践であるといえる。

（ライナ・シュルツァ）

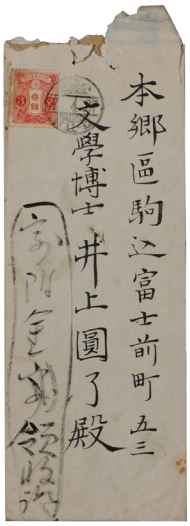


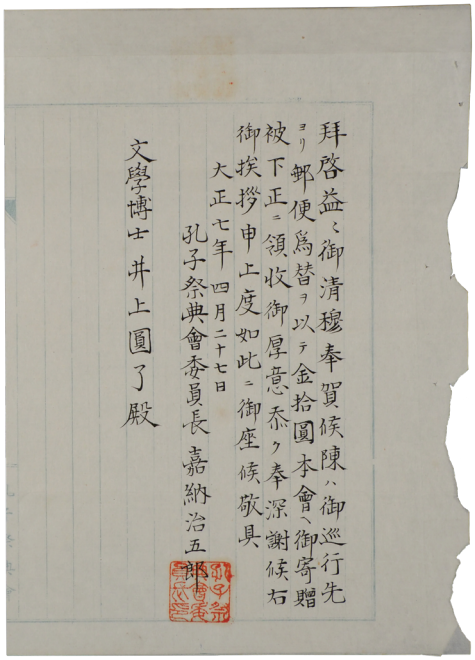
井上円了墓（蓮華寺、現中野区）

013

井上円了宛　嘉納治五郎書簡（寄付金礼状）

⊙嘉納治五郎筆　⊙大正７年（1918）４月27日
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵


本郷區駒込富士前町五三
文學博士 井上圓了殿


拜啓益々御清穆奉賀候陳ハ御巡行先
ヨリ郵便爲替ヲ以テ金拾圓本會ヘ御寄贈
被下正ニ領收御厚意忝ク奉深謝候右
御挨拶申上度如此ニ御座候敬具
大正七年四月二十七日
孔子祭典會委員長 嘉納治五郎
文學博士 井上圓了殿

講道館柔道の創始者、嘉納治五郎（1860-1938）は、東京大学を卒業した後、学習院教頭などを経て、東京高等師範学校（現筑波大学）校長をつとめた教育家でもある。嘉納と井上円了との出会いは、明治10年代にさかのぼる。明治14年（1881）、円了は嘉納が卒業するのと入れ替わりで東京大学文学部に入学するが、嘉納も引き続き選科生として東大に残り、１年間、哲学（道義学・審美学）を学んだ。その後、明治17年に円了が東大の教員・学友らと哲学会を創設した際には、嘉納も会員として加わった。こうしたつながりからであろう、哲学館の創立時には、講師として棚橋一郎（1862-1942）とともに倫理学を講じた。

本資料は、大正７年（1918）、円了が孔子祭典会に行なった寄付に対する嘉納からの礼状である。還暦を迎えた円了は、自らを祝うかわりに、東洋大学や真宗大谷大学（現大谷大学）、哲学会、長岡中学校（旧新潟学校第一分校）など、自分にゆかりのある機関・団体に寄付金を贈ることにした。

孔子祭典会（後に財団法人斯文会と合併）は、湯島聖堂で江戸時代に行なわれていた釈奠（せきてん）（孔子祭）を再興することを目的に、東京高等師範学校の教員らが中心となり設立した会で、校長の嘉納が委員長をつとめていた。円了も嘉納たちの活動に賛同して会の発起人に加わり、評議員もつとめたため、同会に寄付を行なったのである。嘉納の回顧談によれば、円了とは友人、仲間といえるほど親しい関係ではなかったようだが（三輪政一編『井上円了先生』、東洋大学校友会、1919年、pp.83-84）、同時代の学者・教育者として互いが認め合い、それぞれの事業に協力しあう間柄だったのであろう。

（北田 建二）

第2章

活動

世界中を実地に視察し、自ら創立した哲学館や哲学堂を拠点として、全国を津々浦々まで訪ねて民衆教育に力を注いだ、行動する哲学者・円了の奮闘をふりかえります。

014

こっくり様の木

⊙竹、麻紐
⊙山﨑記念中野区立歴史民俗資料館蔵

静岡県伊豆で採集した「コックリさん」の脚部分。コックリさんは神意判断の占い法で、明治 19 年（1886）ごろから日本各地で大流行した。明治 20 年刊行の『妖怪玄談』で、明治 17 年ごろ、静岡県伊豆下田（現静岡県下田市）に流れ着いたアメリカの帆走船の乗組員がもたらした「テーブル・ターニング」が日本で「コックリさん」として広まったことを井上円了がつきとめている。

テーブル・ターニングは、テーブルの周囲に数人が集まり、手をテーブルの上に載せると、テーブルが回転し始め、人々の質問に応じて動く占いの一種。日本では、回転するテーブルのかわりに、3本の竹脚と飯櫃（めしびつ）のふたで代用にした。

「コックリさん」の名称は、英語が聞き取れなかったため、ふたがコックリコックリと傾く様子から名づけたとされるが、天理を告げる「告理（こくり）」説もあり、「狐狗狸（こっくり）」と当て字された。

『妖怪玄談』の表紙には、コックリさんに興じる男女の姿が描かれる。円了は、参加者に女性や信仰心が厚く信じやすい者、知力に乏しい者が加わるとコックリさんが移りやすく、知力に長じ信仰心の弱い者が加わると、よい結果を得られないことも指摘している。

英語名を正確に聞き取れていたら「コックリさん」にならなかったことは間違いない。聞き取れなかったからこそ、なんとも不可思議な名前になったのである。

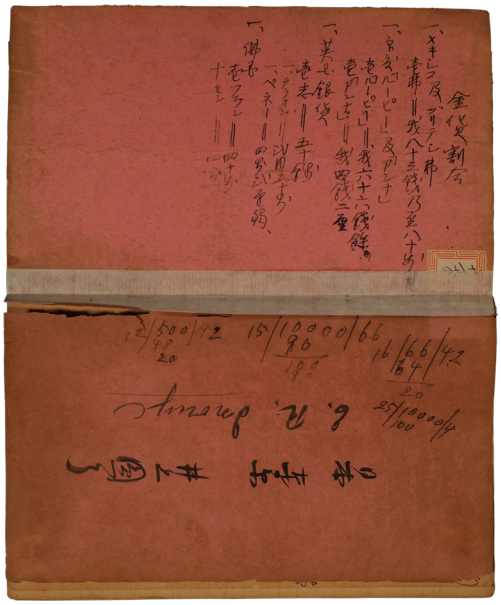
（北河 直子）

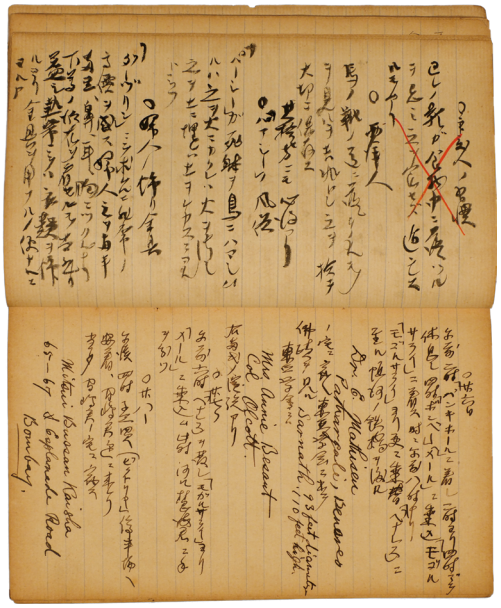
参考：『妖怪玄談』
（初版本、井上円了著、哲学書院発行、
明治 20 年、東洋大学井上円了記念博物館蔵）

015

海外視察ノート

⊙井上円了筆　⊙明治 35 年（1902）11 月～
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵





これは、井上円了が明治 35 年（1902）から翌年にかけての第2回世界周遊旅行の記録である。帳面を 90 度時計回しにして、上面を随想やメモ、下面をその日の出来事と使い分けしている。このインドの旅では、カルカッタ（コルカタ）に留学していた教え子の大宮孝潤（1872-1949）の下宿に訪れたときに、仏籍を求めてチベットに潜入していたがインドに出国したところの、同じく教え子である河口慧海（1866-1945）と偶然出会った。この出会いは、円了に大きな感興を起こしたようで、それを記念して撮った写真がこの旅の紀行録『西航日録』の口絵として使われているほどである。逆に慧海以外の人たちとの多くの出会いは、あらかじめ想定した範囲内であったことがうかがえる。

例えば、ダージリンにかつて日本に亡命していた康有為（1858-1927）を訪ねたことがあげられる。掲出した上面にはそのときに見たチベット人女性の装飾品に着目して記しているが、この風俗は円了の意に染まなかったことが『日録』に見える。

また、ともに大菩提寺を参拝し、12 月 26 日にバンキポールで別れた大谷光瑞（1876-1948）や藤井宣正（1859-1903）らの一行は、この後王舎城跡に赴き霊鷲山の同定を行う。他方、円了と慧海は、ベナレス（ワーラースィー）に向かい、翌日ヘンリー・オルコット（Henry Steel Olcott 1832-1907）、アニー・ベサント（Annie Wood Besant 1847-1933）といった神智学協会のメンバーを訪ね、講演会に出席した。この講演会では、慧海もチベットでの体験を話している。なお、オルコットが明治 22 年 2 月から 4 月に来日した際の通訳のなかに哲学館講師の徳永満之（後の清沢満之 1863-1903）がおり、伝通院、浅草寺で講演を通訳している。

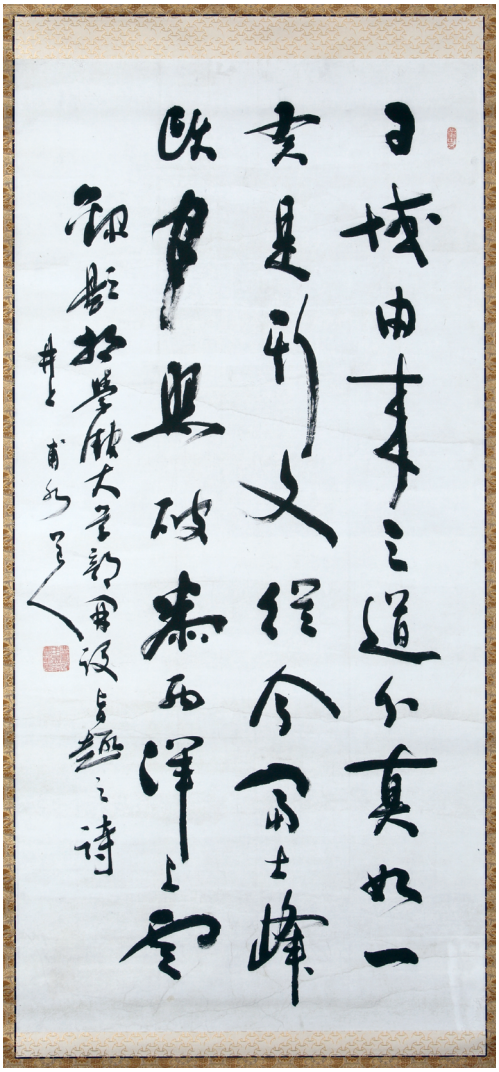
ベナレス対岸のムガルサライ駅でデリーに向かう慧海と別れ、28 日から滞在したボンベイ（ムンバイ）では、三井物産ボンベイ支店長・間島与喜（1859-1944）のところに宿泊した。この間島は、越後国頚城郡（現新潟県妙高市）の出身で、新潟で英語を学習し、商法講習所（現一橋大学）を卒業している。インドにやって来た仏教研究者の世話を多くしており、大宮は終生大恩人として尊んだ。そのほか上面には 29 日に訪れた沈黙の塔で見聞したパールシーの習俗が記されている。

（出野 尚紀）

016

哲学館大学開設旨趣之詩

⊙紙本墨書、掛幅　⊙井上円了書　⊙明治 35 年（1902）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



【漢詩】
［印］
日域由来三道分　真如一貫是斯文
従今富士峰頭月　照破泰西洋上雲
録題哲學館大學部開設旨趣之詩
井上甫水道人［印］

【書き下し】
日域は由来、三道分かるるも、真如の一貫するは是れ斯文なり。今より富士峰頭の月、泰西洋上の雲を照破す。

第 1 回目の欧米視察から帰国した円了は、明治 22 年（1889）7 月以降、哲学館改良についての趣旨文を相次いで発表する。欧米諸国では自国の文化を守り生かすような学問・教育がなされていること、その上で東洋学が盛んに研究され始めていることに衝撃を受けた円了は、哲学館を大学とするにあたって伝統的な東洋学の研究・教育、そして徳育を重視するという方針を打ち出したのである。この漢詩はそれを主題として作られたという。

「三道」とは、日本（「日域」）に伝えられてきた儒道・仏道・神道のことである。「斯文」は孔子のことばに由来し（『論語』子罕第九）、通常は儒道を指すが、ここでは三道いずれにも同じ真理が一貫しているとする立場から、仏道・神道も含めて日本人が守り伝えるべき「斯文（この学問）」と呼んでいるらしい。三道の区別とその究極における一致は、山頂とそこに到る複数の登山道の譬喩で説かれることが多く、「月」は仏教において「真如」の譬喩に用いられてきた。つまり、新たに「東洋哲学」として捉え直された三道を哲学館が守り究めることで、その真理の光が西洋にまで及び彼らの迷妄を払うのだという、いわば来たるべき東洋からの啓蒙（Enlightenment）の意気込みを語っているのである。

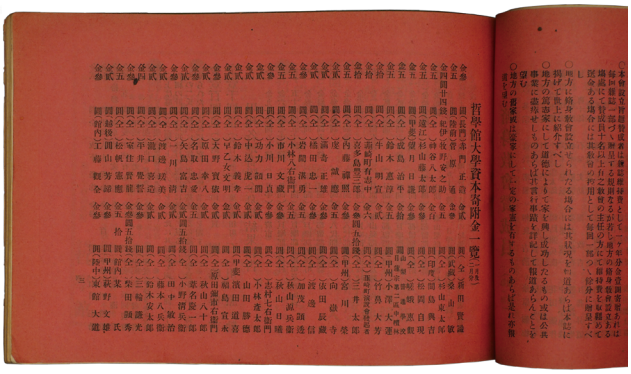
この「斯文」を含む承句は、井上哲次郎（1856-1944）の添削を受けたものであるという（『円了茶話』「第 42 話 詩を知らず」）。円了と哲次郎の付き合いは長く、東京大学において、円了は助教授であった哲次郎から「史学」と「東洋哲学」を学んだ。哲学会の立ち上げにも哲次郎は協力し、以後、円了が何か事業を始める時、必ずといってよいほど哲次郎が名を連ね、あるいは祝辞を寄せており、円了没後の東洋大学においても長く教員・役員を務めた。時には学問上の意見が対立して論難し合う一幕もあったが、晩年の哲次郎は「自分の理想が哲学館創立という形で円了によって実現されたように思える」といった回顧を語っている（昭和 4 年、大学昇格祝賀式の祝辞）。教員と学生として出会い、歳の近い哲学者・教育者として競い合って、官と民という立場の違いはありつつ、しかし理想を一部共有する同志でもあった。円了の随筆にはしばしば哲次郎を揶揄する内容も見られ、お互い少なからず意識し合いながら、付かず離れず同時代を歩んだことが想像される。

（井関 大介）

017

修身教会雑誌（第2号）

⊙安藤弘編、修身教会雑誌発行所発行　⊙明治 37 年（1904）3 月発行
⊙東洋大学井上円了記念博物館蔵



〔表〕甲州各地寄附金募集の結果

	金額（円）	地域（ ）内は現在の地名	滞在日数
1	¥96.50	甲府市（甲府市）	2.5 日
2	¥60.77	南巨摩郡増穂村（富士川町）	1 日
3	¥54.50	北巨摩郡韮崎町・龍岡村（韮崎市）	1 日
4	¥38.00	南巨摩郡鰍沢村（富士川町）	0.5 日
5	¥33.50	北都留郡猿橋駅（大月市）	1 日
6	¥33.00	東八代郡英村（笛吹市）	1 日
7	¥32.10	西八代郡市川大門町（市川三郷町）	1 日
8	¥30.00	中巨摩郡鏡中条村（南アルプス市）	1 日
9	¥29.05	東山梨郡塩山・勝沼村（甲州市）	1 日
10	¥24.00	南都留郡瑞穂村（富士吉田市）	1 日
11	¥23.60	南巨摩郡西島村（身延町）	1 日
12	¥13.50	南都留郡谷村町（都留市）	1 日
13	¥11.00	北都留郡大月駅（大月市）	0.5 日
14	¥9.00	東山梨郡日下部村（山梨市）	1 日

※表記は『修身教会雑誌』第 2 号（付録 p.4）内における記事の記載順序によった。

『修身教会雑誌』は、井上円了が哲学館事件を機に国民全体に修身教育を広めるべく、明治 36 年（1903）に設立された修身教会の機関誌である。雑誌の内容は、修身に関する講話や雑録などであるが、円了の全国巡回講演（巡講）の一端を見ることもできる。例えば、第 2 号の雑報には「井上哲学館主甲州巡回記」があり、明治 37 年 1 月 15 日から 31 日までの 17 日間の巡講について確認することができるが、これについて具体的に紹介していく。

甲府到着の翌 16 日に甲府桜町にあった芝居小屋「桜座」を皮切りに、第一中学校（現山梨県立甲府第一高等学校）など計 16 ヵ所で講演会を開催したほか、2 ヶ所で茶話会を行っている。巡講は哲学館出身者などの発起人がおり、例えば 20 日に中巨摩郡鏡中条村の長遠寺にて行った巡講は、住職・望月日謙（1865-1943）の発起によるものであった。日謙は、この後日蓮宗総本山である身延山久遠寺第 83 世法主、日蓮宗管長、立正大学長を歴任した人物で、長遠寺住職の時には幼少期の石橋湛山（第 55 代内閣総理大臣 1884-1973）を養育したことでも知られている。

このように巡講を行いながら、明治 36 年施行の専門学校令を受け、翌 37 年 4 月から大学部・専門部を設置した私立哲学館大学の資本金寄付を集めている。第 2 号雑報の「哲学館大学資本寄附金一覧（一月及二月分）」には、2 円以上の寄附者と金額が記されているが、山梨県内の人名・団体が半数以上を占めている。そして、この記事に続けて「甲州各地寄附金募集結果報告」とあり、円了の巡講場所にあわせて滞在日数と寄付金額が記され（〔表〕参照）、総計 488 円 52 銭の寄付を集めている。

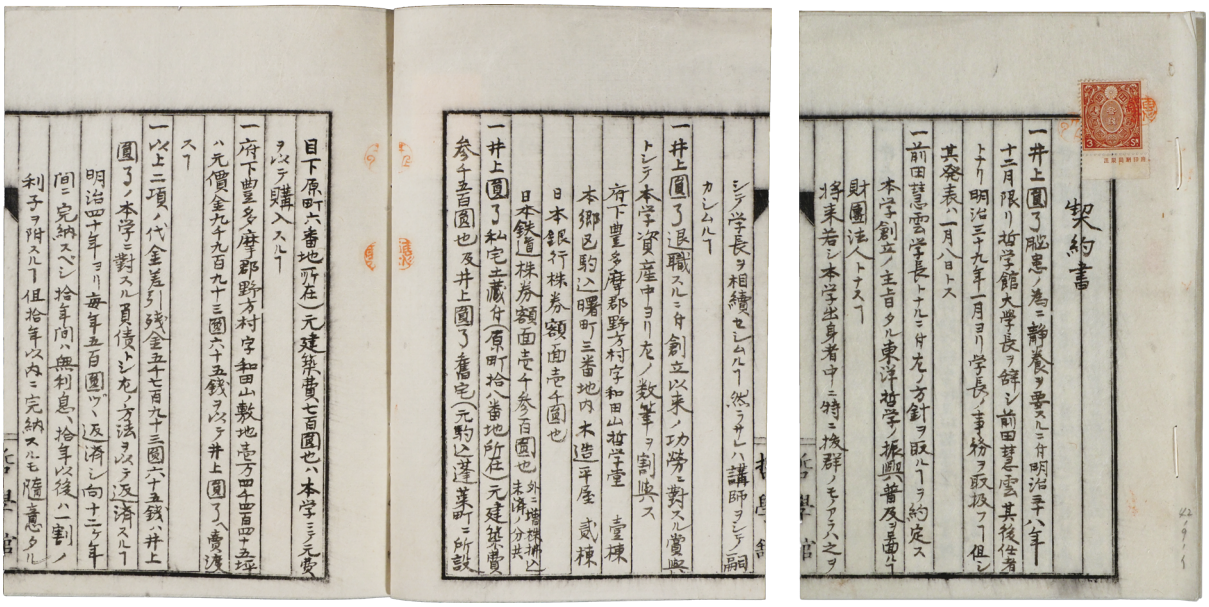
円了の巡講活動は、明治 39 年に哲学館大学学長を退隠するまでは学校への寄付金募集もあわせて行った。大学から離れると、その後は国民道徳の普及と哲学堂の建設・拡張を目的として亡くなるまで精力的に続けられている。

（龍澤 潤）

018

契約書（井上円了、前田慧雲、哲学館大学学長事務引継）

⊙井上円了・前田慧雲作成　⊙明治 38 年（1905）12 月 28 日
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



契約書

一井上圓了脳患ノ為ニ静養ヲ要スルニ付明治三十八年十二月限リ哲学館大学長ヲ辞シ前田慧雲其後任者トナリ明治三十九年一月ヨリ学長ノ事務ヲ取扱フヿ但シ其発表ハ一月八日トス

一前田慧雲学長トナルニ付左ノ方針ヲ取ルコトヲ約定ス

本学創立ノ主旨タル東洋哲学ノ振興普及ヲ図ルコト

財團法人トナスコト

将来若シ本学出身者中ニ抜群ノモノアラハ之ヲ学長トシテ学長ヲ相續セシムルコト然ラサレハ講師ヨリシテ適カレシムルコト

一井上圓了退職スルニ付創立以来ノ功勞ニ對スル賞與トシテ本学資産中ヨリ左ノ数筆ヲ割與ス

府下豊多摩郡野方村字和田山哲学堂　壹棟
本郷区駒込曙町三番地内木造平屋　貳棟

日本銀行株券額面壹千圓也

日本鉄道株券額面壹千参百圓也　外ニ墻壁補修ノ費用ハ分共

一井上圓了私宅土蔵付（原町拾八番地所在）元建築費参千五百圓也及井上圓了舊宅（元駒込蓬莱町ニ所設目下原町六番地所在）元建築費七百圓也ハ本学ニテ元愛ヲ以テ購入スルコト

一府下豊多摩郡野方村字和田山敷地壹万四千四百四十五坪ハ元價金九千九百九十三圓六十五錢ヲ以テ井上圓了ハ賣渡スコト

一以上二項ノ代金差引残金五千七百九十三圓六十五錢ハ井上圓了ノ本学ニ對スル負債トシテ左ノ方法ヲ以テ返済スルコト

明治四十年ヨリ毎年五百圓ツヽ返済シ尚十二ヶ年間ニ完納スベシ拾年間ハ無利息拾年以後ハ一割ノ利子ヲ附スルコト但拾年以内ニ完納スルモ隨意タル

この契約書は、哲学館を創立した井上円了が哲学館大学から退隠するに際して、現代の大学のあり方につながる条件を定めた歴史的文書である。明治 35 年（1902）12 月 13 日に発生した文部省による哲学館の中等教員無試験検定校の認可取り消しを発端とし、その後に明治時代の2大思想問題の一つにあげられる、いわゆる「哲学館事件」という社会問題となり、その後に大学内部の対立を引き起こし、最終的に円了は「脳患ノ為ニ静養ヲ要スル」事態となり退隠を決意した。

この文書のポイントは、3 点にしぼられる。わざわざ「前田慧雲学長トナルニ付左ノ方針ヲ取ルコトヲ約定ス」を前文で断り書きをして、円了は以下のことを列記した。

①本学創立の主旨たる東洋哲学の振興普及を図ること。
②財団法人とすること。
③将来の学長について、本学出身者で抜群のものがあればこれを学長とし、そうでなければ講師の中から学長を選ぶこと。

これによって、大学に円了が全財産を寄付して、財団法人「東洋大学」が設立された。円了による個人経営から法人という集団による経営に転換され、大学名も東洋大学という新しい校名となって、再スタートすることとなった。

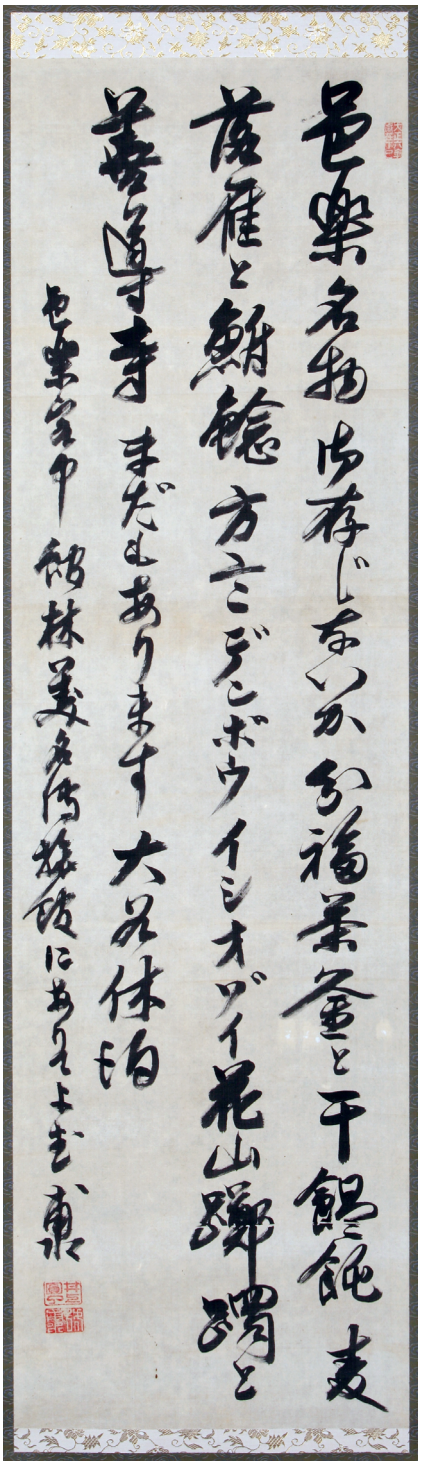
円了は哲学館事件の前後から、哲学館は円了や井上家の私物ではないという批難や、哲学館大学は仏教の一宗一派の学校なのだという誤解に悩まされてきた。そのため、明治 36 年 11 月 15 日に著書の『円了漫録』に公開遺言状を書いて、「学校は余か社会国家に対する事業として着手せしものなれば、井上家の子孫をして之を相続せしめ、又之に関係せしむる道理なく又必要なし」と宣言していたが、円了はこの契約書によってそれを実現したことになる。「学校は社会の共有物である」という円了の理念は、現代も継承されている。

（三浦 節夫）

019

邑楽名物御存じないか

⊙絹本墨書、掛幅　⊙井上円了書　⊙大正６年（1917）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



書かれている詩は井上円了が大正６年（1917）12 月の群馬巡講で群馬県邑楽郡館林町（現館林市）に滞在した際に詠んだもので、邑楽郡の名物を集めて、俗謡として作詞された。

「分福茶釜」というのは館林の曹洞宗茂林寺に伝わる伝説の茶釜のことである。昔、この茶釜で湯を沸かし、千人の客に飲ませたが、何度汲んでもお湯が尽きることがなかったということから、妖怪の類いとされた。円了は館林で講演をした翌日、実際にこれを見物にいっている。

「干饂飩」や「麦落雁」は、館林地域が全国でも有数の麦の産地であることを象徴する名物であり、「鮒」「鯰」の川魚は、利根川の上流中流に位置するこの地域一帯の伝統食となっている。円了も名物の鮒のアライを食べており、これを「天下一品の美味なり」と絶賛している。（『井上円了選集』第 15 巻、東洋大学、1998 年、p.250）

この詩は、邑楽郡の伝説や食文化、ほかにも方言や名所、偉人の名前などが盛り込まれており、あらゆる面からこの地域の特徴を捉えた作品といえる。

（太田 有紀）

（書）
［印］
邑楽名物御存じないか　分福茶釜と干饂飩　麦
落雁と鮒　鯰　方言デンボウ　イシ　オゾイ　花山躑躅と
善導寺　まだもあります　大谷休泊
邑楽客中館林美名傳旅館にありてよむ　甫水［印］

020

備後国巡講中作

⊙紙本墨書、屏風（六曲一双）　⊙ 井上円了書　⊙大正２年（1913）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

本資料は、井上円了が第１回広島県巡講を行なった際に道中の情景を詠んだ漢詩を屏風に仕立てたものである。漢詩は十二首あり、全て七言絶句である。第１回広島県巡講は、大正２年（1913）３月14日から５月15日にかけて行われ、福山・比婆（ひば）郡・三次（みよし）・甲奴（こうぬ）郡・世羅郡といった旧備後国（広島県東部・北部〔備北〕）を巡講した。この巡講は、『南船北馬集』第８編に記録されている。

３月14日に兵庫県北条町（現加西市）から汽車で福山に入った円了は、翌日景勝地である鞆（とも）の浦に宿をとった。その景色に感動した円了は、次のような漢詩を詠んだ。

「鞆湾風月絶塵埃 明媚自凌厳島来 天欲使人養仙寿 備山尽所築蓬莱」（右隻一扇）

円了は、「鞆の浦の美しさは日本三景の厳島を凌ぐほどで、天は備後の山が途切れる場所に蓬莱を作った」と、その景観の美しさを讃えた。

円了は鞆から瀬戸内海の島々を巡講し、3月21日に福山に戻った。この時車窓から眺めた福山城を漢詩に詠んでいる。（本資料右隻三扇および『南船北馬集』第８編）。そして福山から北上し、中国山地の山間の比婆郡を巡講し、４月24日には三次に宿をとった。

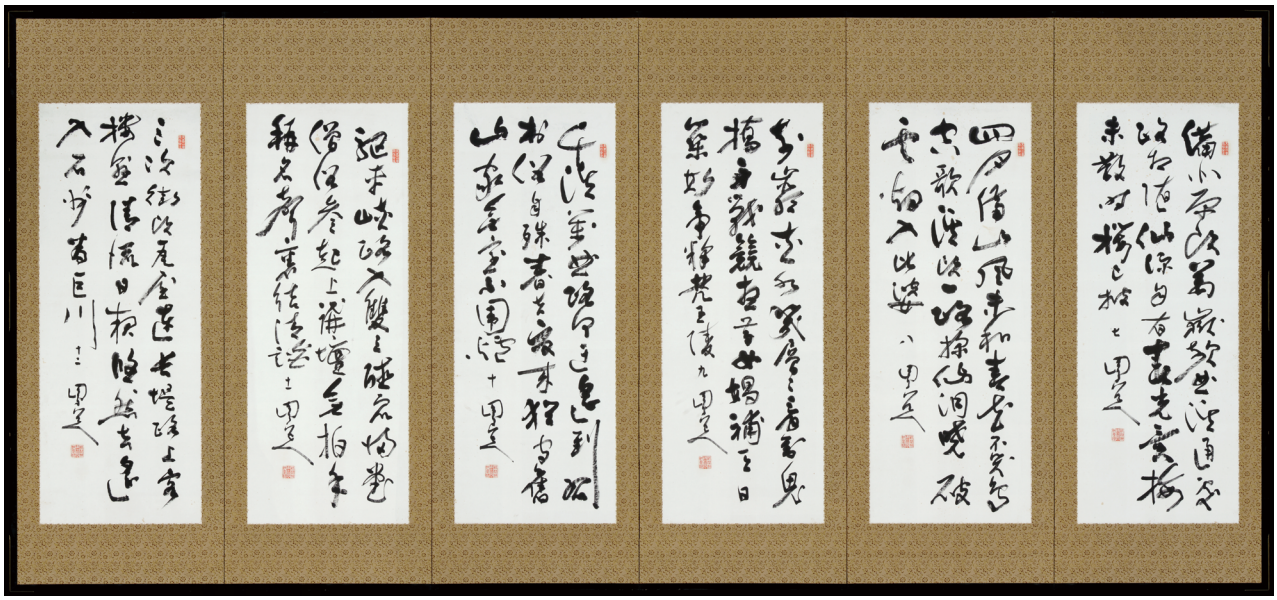
「三次街頭瓦屋連 長堤路上客楼懸 清流日夜悠然去 遙入石州為巨川」（左隻三扇）

三次は、古くから山陽と山陰を繋ぐ街道の宿場町として栄えた地で、町の西側を流れる巨川（江の川）は日本海に注いでいる。また、三次は怪談「稲生物怪録（いのうぶっかいろく）」の舞台となった地である。円了は妖怪と縁の深い地を訪ね、その風景に感嘆し、上記の漢詩を詠んだ。

三次を出た円了は南下し、尾道を経て５月15日に広島県を去った。

円了は、行く先々で「よぅ来んさった」と地元の歓迎を受け、講演や歓談に励んだ。その合間に見える景色はとても素晴らしく心地のよいものであり、何度も広島弁をまねて「ぶちええのぅ」と感嘆したはずである。円了は、その風景や素直な気持ちを漢詩に詠んだ。本資料には、そんな円了の素直な気持ちが表れている。また本資料を読むと、円了の巡講の行程をなぞることができる。本資料は、まさに地誌・観光案内も兼ねたような資料である。資料を読んでいると、気づけば広島県に行きたくなっているのではないだろうか？

（重藤 智彬）



右隻―翻刻

[印]
鞆湾風月絶塵埃　明媚自凌
厳島来　天欲使人養仙寿　備
山尽処築蓬莱　一　円了道人[印]

[印]
携去吟筇入備南　夜来林墅雨
俄涵　梅花已落桃将発　今日
始看春色酣　二　円了道人[印]

[印]
鉄路一貫三備平　車窓先認福
山城　汽煙横処楼台聳　疑
是春天蜃気生　三　円了道人[印]

[印]
春雨蕭々一棹風　朝烟未散望
冥濛　欲留孤錫何辺好　影
向松陰古梵宮　四　円了道人[印]

[印]
万頃蒼波麦隴風　一條流水
自西東　野梅花尽夜寂々
只望青山入府中　五　円了道人[印]

[印]
雪嶂林巒到處堆　出渓去又
入渓來　山邨春色堪吟賞
青麦田間挾白梅　六　円了道人[印]

右隻―書き下し

鞆（とも）湾の風月は塵埃を絶つ、明媚自（おの）ずから厳島を凌（しの）ぎ来る、天人をして仙寿を養わしめんと欲し、備山の尽きる処蓬莱（ほうらい）を築く。

吟筇（ぎんぎょう）を携え去（ゆ）きて備南に入る、夜来林墅（りんしょ）の雨俄かに涵（うるお）す、梅花已に落ちて桃将（まさ）に発（ひら）かんとす、今日始めて春色の酣（たけなわ）なるを看る。

鉄路一たび貫いて三備平らかなり、車窓先ず認む福山城、汽煙の横たわる処に楼台聳え、疑うらくは是れ春天に蜃気（しんき）の生ずるかと。

春雨蕭々（しょうしょう）一棹の風、朝烟未だ散せずして望むも冥濛（めいもう）なり、孤錫（こしゃく）を留めんと欲するも何れの辺を好しとせん、影向松の陰の古梵宮。

万頃なる蒼波（そうは）麦隴（ばくろう）の風、一条の流水西より東す、野梅花尽きて夜寂々、只青山を望んで府中に入る。

雪嶂（せつしょう）林巒（りんらん）到る処堆（うづたか）し、渓を出でて去り又渓に入りて来たる、山邨（さんそん）の春色は吟賞するに堪え、青麦の田間に白梅を挾む。

左隻―翻刻

[印]
備北原頭万嶽欹　曲渓通処
路相随　仙源自有春光異　梅
未散時桜已披　七　円了道人[印]

[印]
四月備山風未和　春花不笑鳥
空歌　渓頭一路探仙洞　暁破
雲烟入比婆　八　円了道人[印]

[印]
奇巖夾水幾層々　看到鬼
橋身戦競　想昔女媧補天日
築斯帝釋梵天陵　九　円了道人[印]

[印]
千渓万曲路何迂　遥到孤
村俗自殊　春去夏来猶聞旧
山家無室不囲炉　十　円了道人[印]

[印]
駆車峡路入双三　聴衆満堂
僧俗参　起上講壇無拍手
稱名声裏結清談　十一　円了道人[印]

[印]
三次街頭瓦屋連　長堤路上客
楼懸　清流日夜悠然去　遥
入石州為巨川　十二　円了道人[印]

左隻―書き下し

備北の原頭万嶽欹（そばだ）ち、曲渓通ずる処路相い随う、仙源自（おの）ずから春光の異なる有り、梅未だ散らざる時桜已に披（ひら）く。

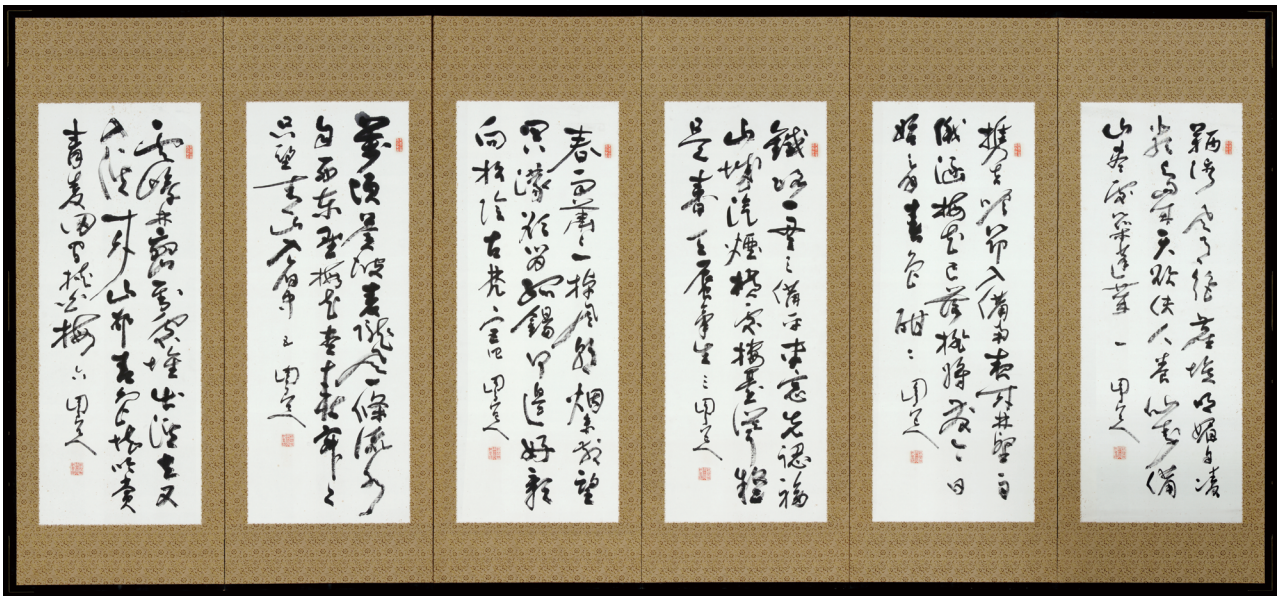
四月の備山は風未だ和まず、春花笑（さ）かざるに鳥空しく歌う、渓頭の一路仙洞を探ね、暁に雲烟を破って比婆（ひば）に入る。

奇巖（きがん）水を夾（はさ）んで幾層々、鬼橋に看到れば身戦競（せんきょう）、想う昔女媧（じょか）の天日を補うを、この帝釋（たいしゃく）に梵天の陵を築く。

千渓万曲して路何ぞ迂（う）なる、遥かに孤村に到れば俗自ずから殊（こと）なる、春去り夏来たり猶旧（ふるき）を聞くがごとく、山家に室無く炉を囲まず。

車を駆りて峡路に入ること双三（ふたみ）、聴衆堂に満ち僧俗に参（まじ）う、起ちて講壇に上れども拍手無し、称名の声裏に清談を結ぶ。

三次（みよし）の街頭に瓦屋連なり、長堤の路上に客楼懸かる、清流日夜悠然と去り、遥か石州に入りて巨川と為る。



021

印章

⊙石　⊙明治 43 年（1910）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

原寸大

側面に「明治 43 年冬」と刻まれた「無官無位非僧非俗 妖怪道人円了」という落款印は、哲学館の経営を退き、民衆教育に奔走していたころの井上円了が好んで用いたものである。そもそも円了はこの名乗りに、いかなる意味を込めていたのだろうか。

このことを考える上で誰よりも無視することができないのが、親鸞(1173-1263)である。よく知られているように親鸞は、「承元の法難」によって越後に流罪となり、国家によって正式に認められた官位としての僧侶の位を失った。しかし同時に、越後の民衆たちと暮らす中で、より広く人々に仏法を伝えるという使命を見出し、自身を「僧に非ず俗に非ず（非僧非俗）」と称するようになった。

円了が用いたこの落款印は、まずはこうした親鸞の歩みを明確に意識したものと考えてよいだろう。実際円了は明治 44 年（1911）におこなったある講演で、大学卒業後は宗門を離れて「俗人」となり、その上で仏教の「頽勢を挽回」することを誓ったゆえに、自ら「非僧非俗」と号するようになったと述べている（井上円了「宗祖大師の御遠忌に際して平素の所信を自白す」、『宗報』明治 44 年 6 月号）。真宗寺院の長男として生まれ、東本願寺の留学生として東大で学んだ円了が宗門から離れるには相当の決意が必要であったはずだが、しかしそこには「宗祖」親鸞と同じような道を歩んでいるのだという自負があったのではないだろうか。

そしておそらく、修身教会運動を中心に独自の民衆教育活動に取り組んでいた晩年の円了は、その思いを強くしていたと考えられる。円了にとって妖怪学は、人々を真理へと導くための「方便」であった。当時多くの人々を惑わせたり、楽しませていた妖怪は、民衆に哲学・宗教の教えを示すための格好の題材でもあったという。そのように考えると、「妖怪道人」という名乗りにも、やはり民衆と共に生きた親鸞のイメージが（ユーモアも交えつつ）重ね合わされているのかもしれない。

（長谷川 琢哉）

022

抱子幽霊図

⊙紙本着色、掛幅　⊙間宮章堂（孝太郎）画　⊙年代不詳（明治末か）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

作者の間宮章堂は明治７年（1874）、埼玉県生まれ。東京美術学校（現東京藝術大学）の助教授を務めた寺崎広業（1866-1919）に師事し創作活動に入ったが、作品はさほど知られていない。

子育て幽霊の話は、落語の「飴屋幽霊」などで広く知られているが、宋代の『旃陀越国王経』や西晋の『諸徳福田経』にルーツを求めることができるとされ、親への報恩を説くものとして僧侶の説法の題材に取り上げられたらしい。そのためか、遺児は高僧になったとされる結末が多い。

数多描かれた幽霊画にあっても、子を抱く幽霊の図はさほど多くなく、幕末から明治初期に活躍した安田米斎（1848-1888）の作品が知られている。本作のような悲壮感を持って子を抱く女性の姿は鳥山石燕（1712-1788）の『画図百鬼夜行』（1776 年刊）に見られる「姑獲鳥」が想起されるが、先行する佐脇嵩之（1707-1772）の『百怪図巻』（1737 年刊）に「うぶめ」が掲出されており、同書は狩野元信（1476-1559）が描いたとされる写本を模写したものとされていることから、「血まみれで子を抱く女性」図の祖形は 16 世紀前半には存在した可能性も考えられる。もっとも、「産女」の記述は平安時代に成立したとされる『今昔物語集』に平季武が産女から赤子を受け取るエピソードが掲出されており、そのイメージは中世以前に定着していたと考えられる。

「うぶめ」に宛てられる「姑獲鳥」の表記は、西晋の『玄中記』や明代の『本草綱目』に記された中国の伝承上の妖鳥に由来する。唐の『酉陽雑俎』や北宋の『太平広記』では「夜行遊女」とあり、夜間に飛来し幼児をさらう鬼神の一種とされ、『和漢三才図会』（1712 年刊）にも同様の記述がある。この「姑獲鳥」が、日本の「産女」と同一視され、混用されたといわれているが、円了先生は『妖怪学講義』合本第６冊において「妄説」とされ、「説明を要するまでにあらず」と記されている（『井上円了 妖怪学全集』第３巻、柏書房、1999 年、p.626）。先生は「うぶめ」を「怪物」として分類されており、江戸期のいわゆる妖怪図鑑群と同様、「幽霊」とは別物としている（同、p.622）。このことを踏まえて本作をみると、江戸時代以来の伝統的な「足のない幽霊」でなく、「足のある女性」であることから、本作も「うぶめ」を描いたものとすることもできよう。

（天ケ嶋 岳）

023

狸と狐

⦿石、土、木
⦿山﨑記念中野区立歴史民俗資料館蔵

井上円了のコレクションには動物も多く、亀、猫、狸、狐、馬、熊、猿、蛇、鳩、アルマジロ、ふぐなどがある。はく製化したものと、土・石・木・金属製のものに分けられるが、一番数が多いのは狸である。

狸は民話や絵画にもよく登場し、なじみがふかい。「他を抜く」ことから、商売繁盛と結びついて縁起のよい動物とされる一方、「狐狸（こり）妖怪」とも言われるように、化けて人をだますもの、民話の「かちかち山」では老婆を食い殺すものとして登場する。

狸と寺は関係が深い。その代表は茂林寺（もりんじ）（群馬県館林市）の「分福茶釜（ぶんぶくちゃがま）」（または文福茶釜）に登場する狸だろう。これは茂林寺縁起の守鶴（しゅかく）という僧の正体が狸だったことに由来するが、狸コレクションにも袈裟（けさ）姿に腹部分が木魚の狸がいる（写真中央）。木魚を腹に抱えた狸の姿は、円了の生まれ育った寺と、狸と寺のつながりを示す２重の意味を持つのではなかろうか。

円了が日本各地で講演した旅の記録『南船北馬集』第７編に、大正元年（1912）に小名浜（現福島県いわき市）の旅館で「その形すこぶる妖怪」な文福茶釜の鉄瓶を用いているのを見て、旅館主に交渉して交換してもらったという記述がある。当館の円了コレクションには鉄瓶がないため、どこかで失われてしまったのだろうが、「すこぶる妖怪」な鉄瓶が、狸の顔と手足が出ているものだったら、と想像してみるのも楽しい。

（北河 直子）

024

喫煙具

⊙竹、木、動物の角、象牙、牛皮、植物の実、貝殻など
⊙山﨑記念中野区立歴史民俗資料館蔵

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

明治時代に３回の世界旅行をなしとげ、日本国内も全都道府県に講演でおもむいた井上円了が旅先で蒐集したものは、総点数800点以上にのぼる。喫煙具は70点近くあり、カッパ、カエル、鬼、般若、人面という変わり種や、ドクロ・骸骨モチーフという円了が好んだデザインが多い。好事家好みといわれるようなものとは異なるが、カエル・蛇・ナメクジの「三すくみ」の関係にあるものや、「火用心」と縫い取られたたばこ入れ（緒締めの骸骨後頭部には「死用心」と彫られている）、墓石型たばこ入れの卒塔婆（そとば）にくくられた骸骨は、寺生まれで生死が身近にあった環境と、「妖怪博士」とあだ名された妖怪学者の視点があわさった喫煙具といえよう。

貝殻のキセル、動物の角製パイプなど、訪れた国や土地ならではの材料の喫煙具が多いのも注目すべきところである。嗜好品だからこそ、遊び心あるものや変わった形を集めた円了のセンスは、今日見ても瞳目（どうもく）に値する。

①「カエル・蛇・ナメクジ」のたばこ入れ、②人面のたばこ入れ（鳥取県鳥取市）、③墓石型のたばこ入れ、④「火用心」のたばこ入れ（緒締めは２つのどくろと木魚、鬼面と般若面様のもの）。⑤水牛の角のパイプ（南アフリカ、明治44年）、⑥蕃石榴（ばんざくろ）の実のたばこ入れ（台湾、明治44年）、⑦パイプ（ノルウェー、明治44年）、⑧貝殻のキセル（三重県志摩）。

（北河 直子）

025

哲学堂の国宝的宝物（伝文殊菩薩像、閻魔像、不動明王像）

⊙木造①②、絹本着色・掛幅③
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵①、山崎記念中野区立歴史民俗資料館蔵② ③

①伝文殊菩薩像

②閻魔像

③不動明王像

哲学堂は、明治 39 年（1906）に哲学館大学（後の東洋大学）学長を退任した井上円了の社会教育活動の拠点となった場所である。その敷地は、もともとは大学の移転予定地であったが、円了が学長を辞める際、大学から個人で買い取り、精神修養を目的とする社会教育の場として整備・拡張を進めていった。園内には、哲学にちなんだ名称をもつ建造物・庭園・モニュメントなどがつくられていき、「七十七場」として一般に公開されたが、それらのなかには、「無尽蔵」や「絶対城」といった、現代でいう博物館・図書館に類する施設も含まれていた。

無尽蔵は、海外視察や全国巡回講演（巡講）の際に収集した品物を収蔵・展示する陳列所兼収蔵庫で、いうなれば博物館である。もっとも、資料の体系的な収集・展示が行われていたわけではなく、円了の言葉を借りれば「陳列不整頓玉石同架式」に、種々雑多なものが棚などに置かれていた。それらのなかでも、円了が他の品物とは分けて 2 階の北側に置き、「哲学堂の国宝的宝物」として珍重したものが、①伝文殊菩薩像、②閻魔像、③不動明王像の 3 点である。

①は寄木造りの仏像で、明治 22 年、哲学館が麟祥院境内（現東京都文京区湯島）の仮教場から本郷区駒込蓬莱町（現文京区向丘）の新校舎に移転する際、「精神上の師」と仰ぐ勝海舟（1823-1899）から贈られたもの。②は哲学堂の建設工事で腕を振るった建築技師・山尾新三郎、③は日光山輪王寺の前門跡から贈られたものである。

円了が、こうした仏像などの収集を行なうようになったのは、明治 20 年代にさかのぼる。第 1 回海外視察でパリの「仏像博物館」（現ギメ東洋美術館）などを見学した円了は、帰朝した翌年の明治 23 年、東洋学の振興のため神仏の古像などを集めて哲学館に「古像陳列所」を設置する計画を発表しており、①はその陳列所に置くコレクション第 1 号であった（『天則』第 1 編第 12 号、哲学書院、1890 年、広告ページ、および「哲学館移転式始末」、『哲学館講義録』第 2 年級第 1 期 33 号号外、1889 年、p.15）。残念ながら、哲学館ではこの陳列所の構想は実現せず、哲学堂において収蔵・展示品の対象を広げ実現したのであるが、この「国宝的宝物」を見ると、コレクターである円了の関心の中心にあったのは、こうした仏の像であったと考えられる。

（北田 建二）

026

絶対城（御大典紀念図書館）

⊙木造２階　⊙山尾新三郎（設計）　⊙大正４年（1915）11 月竣工
⊙中野区立哲学堂公園内

絶対城正面外観

絶対城一階内部

『哲学堂図書目録』一～十（手稿、大正時代）

井上円了が哲学堂を「精神修養ノ公園」と位置づけ、明治の終わりから大正期にかけて宇宙館（講義室）などを次々に建設していったことはよく知られている。さらに大正４年（1915）、哲学堂内に「図書館ヲ併置スルノ必要ヲ感シ、一昨年来工事ニ着手シ、御大典紀念事業トナサント欲シ」建設したのが絶対城である。円了にとっての絶対城は、大正天皇即位の記念事業の一環であった（井上円了編『哲学堂図書館図書目録』、哲学堂、1916 年、緒言 p.1）。

絶対城に収蔵されていた 21,000 冊あまりの蔵書類の歴史的・文化的価値の高さは、いまさら論をまたない。右上の写真は、『哲学堂図書目録』と題した目録の手稿である。これほど大量の蔵書を分類・整理し、利用に供することは、現在でもなお困難な作業であり、特筆すべきものといえよう。しかし、注目したいのは、蔵書の資料的価値というよりは、円了がなぜ御大典記念として図書館を設置しようとしたのかである。

当時の新聞をみると、大正４年の天皇即位礼前後に、官民あげて「御大典紀念」と銘打った各種事業が行われていたことがわかる。この事業は文化的側面をもつものが多かったが、そのひとつとして実施されたのが図書館設置である。たとえば、大正４年５月に山口県下関市が図書館を設置している（『朝日新聞』、1915 年５月 15 日）。さらに、公立図書館だけでなく、横浜市綱島村（現横浜市港北区）の有力者であった飯田家においても地域住民が利用する私設の図書室建設計画が持ち上がっていた（神奈川県立公文書館寄託「飯田家文書」）。

天皇即位礼を契機に「官民あげた図書館設立ブーム」が巻き起こった理由は、必ずしも明らかではない。現時点での展望を述べておけば、この時期「教養」を身につけることにより自己の生活を新たな段階に引きあげたいという「自己上昇」の動きが、都市部・農村部を問わず盛んになっていた。図書館設置は、こうしたニーズに対応するものであったと考えられる。円了が建設した絶対城も御大典記念をめぐる社会的動向のなかで捉え直すこともできよう。絶対城とその目録・蔵書類は、近代図書館の歴史を語るうえでも重要なものである。

（中村 崇高）

027

井上円了愛用の品

⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

筆、筆立て、筆置き、帽子、眼鏡、旅行かばん――これらはみな井上円了が愛用していた品だとされている。

その人が好み、傍らに置き、いつも使っていたものを愛用品と呼ぶ。そうしたものたちからは、素材や構造などの情報のほかにも、記録や文献の中だけでなく、ものにまつわる人間が生きていた姿を感じ取ることができる。

この旅行かばんは、大正８年(1919)に円了が中国で行なった生涯最後の講演旅行で携行していたものである。持ち手には南満州鉄道（満鉄）が経営する大和ホテルのタグ、側面には日本郵船の客船・静岡丸のラベルが付けられている。円了は、３度の世界旅行で見識を広めた後、亡くなるまで全国各地を巡って講演を行なった。その傍らにはこのかばんがあったのかもしれない。

博物館が担う主な役割のひとつに、資料の保存がある。現在を生きる人々に情報を還元するだけでなく、未来の人々にも伝え残すためである。貴重な芸術作品や重要な功績を大切にし、後世に残すことは広く一般にも理解を得やすい。しかし、特別でないものは、残そうという意思が働かない限り残ることが困難となる。普段何気なく使っている道具や日々の暮らしの様子は、段々と移り変わる時代の中で過去の一部となり、やがて消えていく。

いま、生きている私たちが過去のことを考え、知ろうとするとき、手掛かりとなるのは過去から現在まで残されてきたものたちである。そして、いま、生きている私たちが目にすることができるのは、現在そこに存在しているものだけである。その裏には、沢山の残らなかったものがある。私たちが「ないもの」から情報を得ることは難しい。

ものは雄弁である。ものに語らせることで、過去を、現在を、これからの時代に伝え残してゆく意味を今一度考えたい。

（古山 千尋）

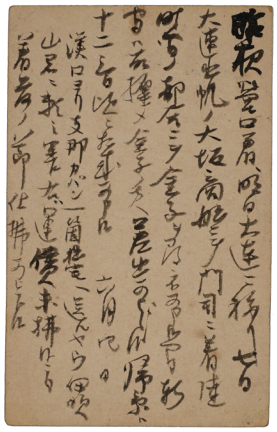
028

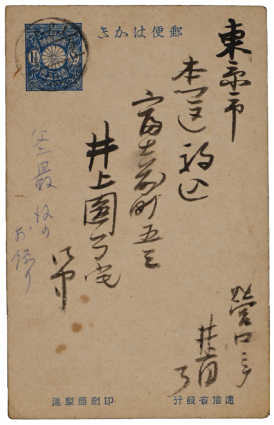
井上円了 最後の便り（留守家族宛はがき）

⊙井上円了筆　⊙大正８年（1919）５月 17 日・５月 21 日・６月４日
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

① 上海にて（５月 17 日付）

② 漢口にて（５月 21 日付）





③ 営口にて（６月４日付）

（通信文・裏面）
昨夜営口着、明日大連ニ移リ　七日
大連出帆ノ大坂商船ニテ門司ニ着陸
時間ノ都合ニテ金子ヲ尋ネ可申候間　新
聞八取纏メ金子ノ方ヘ届出可被下候　帰京ハ
十二三日頃ニ相述可申候　六月四日
漢口ヨリ支那カバン一箇拙宅ヘ送ルヤウ伊吹
山君ニ頼ミ置候　右八運賃未払ひニ付
着荷ノ節　仕払可被下候

（宛名）
東京市
本郷区駒込
富士前町五三
井上円了宅
御中

（宛名欄書込）
父上最後の
お便り
（消印）
［判読不能］

（差出人）
営口ニテ
井上円
了

大正８年（1919）５月から６月にかけて、中国での巡回講演の旅に出ていた井上円了が、東京の家族に宛てた３通のはがきである。追悼文集『井上円了先生』（三輪政一編、東洋大学校友会発行、1919 年）によると、５月５日に東京を出立した円了は、翌々日の朝に門司港から船に乗り、同月 10 日午前、中国・上海に到着した。翌日から４日間にわたり上海、蘇州（江蘇省）を巡回して 10 席の講演をこなした後、15 日からは観光のため、ハードスケジュールの合間を縫うようにして杭州（浙江省）へと向かった。

①は、杭州から上海に戻った後、投函した絵はがきである。表面（宛名面）には、５月 17 日の日付とともに、通信文として前日と前々日に杭州の景勝地、西湖十景（せいこじっけい）を遊覧したことが記されている。さらに、この日の晩、汽船に乗って長江を遡上し、南京を経て漢口（現湖北省武漢市）へと向かうとある。裏面には、西湖十景のひとつ、「雷峰夕照（らいほうせきしょう）」を写した写真が印刷されているが、これは円了から家族への“景色のお裾分け”であろう。

②は、21 日朝、漢口に無事到着したことを知らせるもので、裏面はエンボス加工された花の図案と「南京孝陵石人」（明孝陵の石人像）の写真が印刷されている。このはがきを送った後、円了は月末までに漢口、北京で講演会を開催するとともに、万里の長城の見物にも出かけるなど、精力的な活動を行った。

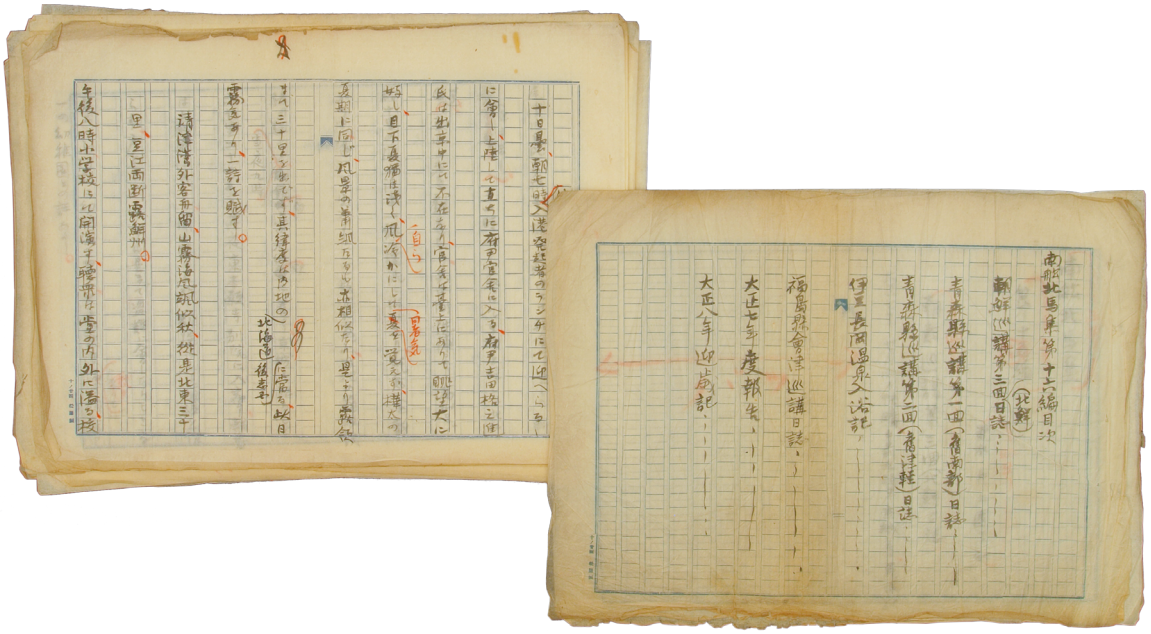
③は、帰国を目前に控えた６月４日、営口（遼寧省）で記したもので、同月７日に大連から船に乗り門司に戻った後、長女・滋野の嫁ぎ先である九州帝国大学教授・金子恭輔宅に逗留してから、東京に戻ることなどが伝えられている。だが、このはがきを記した翌５日、大連に移動した円了は、講演を行なっている最中に脳溢血で倒れ、６日午前２時 40 分に息を引き取り、帰らぬ人となった。61 年の生涯であった。

（北田 建二）

029

井上円了遺稿（南船北馬集 第16編）

⊙井上円了筆　⊙大正8年（1919）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



井上円了の大学退隠後の事業のひとつに、全国巡回講演活動がある。『南船北馬集』はその活動をまとめた紀行文で明治41年（1908）12月20日発行の第1編から大正7年（1918）11月18日発行の第15編までが刊行された。例えば、第1編冒頭の「大和紀行」は明治39年4月、5月発行の『修身教会雑誌』第29号、30号に記されたものを転載したものであり、明治39年度分として『南船北馬集』第1編となった。これらのなかで円了は、その講演旅行を再現することができるほどの詳細さで、交通機関、講演場所、宿泊場所、面会人などを漏らさずに記し、訪問地で採取したフォークロアや感想を綴っている。そのため、明治末から大正にかけての日本各地の習俗を知ることのできる重要な資料と言える。

この第16編は400字詰め原稿用紙に記された大正7年後半の巡講記録で、「朝鮮巡講第三回（北鮮）日誌」中の「大正七年七月四日快晴、午前九時半京城着」から始まり、「青森県第一回（旧南部）日誌」「青森県第二回（旧津軽）日誌」「伊豆長岡温泉入浴記」「福島県会津巡講日誌」「大正七年度報告」と続いて、「大正八年迎歳記」の大正8年の年明けの1月16日から22日に風邪の療養のために葉山を訪れ、そこでつくった和讃で終わっている。さらに、この原稿には朱筆で体裁の指示や推敲が施されており、出版に向けて原稿に手を入れたものと見える。第14編は最終日から3か月後、第15編は最終日から4か月半後に出版されているので、円了が無事に帰宅していれば、7月には出版されたであろう。

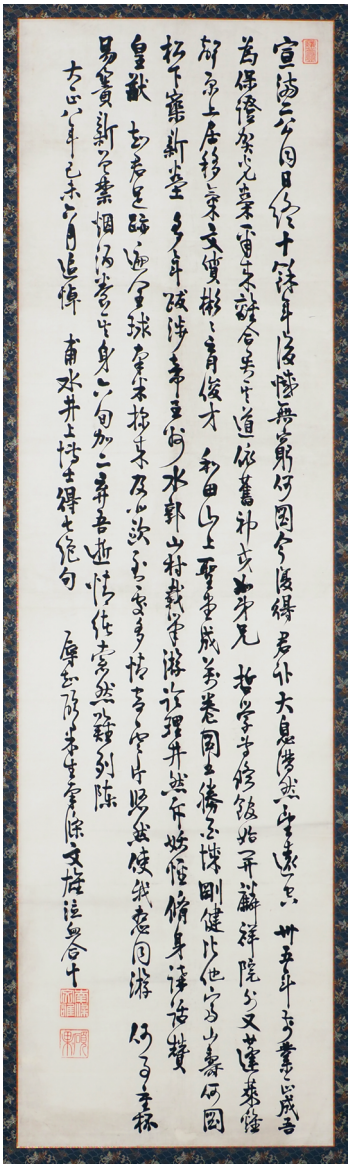
また、他の遺稿として第17編に掲載されるはずの大正8年2月から4月に行った静岡県巡講の記録である、未完の「静岡県巡講第一回（遠江国）日誌」があり、「〔三月〕二十六日、晴れ」で記述が終わっている。

（出野 尚紀）

030

宣満二公同日終（追悼甫水井上博士）

⊙紙本墨書、掛幅　⊙南条文雄書　⊙大正８年（1919）６月
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



真宗大谷大学（現大谷大学）学長をつとめる南条文雄（1849-1927）の自詠自書。

真宗大谷派出身の学者として井上円了の先輩にあたる南条は、サンスクリット（梵語）研究の第一人者として世界的に知られる。明治９年（1876）、東本願寺の留学生としてイギリスに渡り、オックスフォード大学のマックス・ミュラー（Friedrich Max Müller 1823-1900）のもとで最先端の仏教研究を学んだ南条は、同17年に帰朝した後、東京大谷教校の教授に就任し、翌年から東京大学で梵語学講師もつとめた。在京中、大谷派の国内留学生として東大で学んでいた円了をはじめ、同派の清沢満之（旧姓徳永 1863-1903）、本願寺派の藤井宣正（1859-1903）ら、東京で学ぶ若き仏教者たちと親交を結んだ。

本作は、大正８年（1919）６月、客死した円了への追悼作である。七絶七首からなり、第一首目で「宣満二公」（藤井宣正と清沢満之）の命日と同じ６月６日に、今度は円了が亡くなってしまったことを嘆く。続けて、１首ごとにその生涯を振り返りながら功績を称え、最後に数え年62歳で逝ってしまった友への哀惜を詠う。円了に対する南条の友情がこもった一作であり、本書58ページ掲載の「哲学堂八景漢詩」とともに、ふたりの親密な間柄がよくうかがえる。

（北田 建二）

参考写真：左から井上円了、南条文雄、寺田福寿（明治20年代）

（漢詩）
［印］
宣満二公同日終　十余年後憾無窮　何図今復得君臥　大息浣然望遠空
卅五年前業正成　吾為保証賀光栄　爾来離合異其道　依旧神交如弟兄
哲学専修館始開　麟祥院外又蓬莱　鶏声原上居移気　文質彬々育俊才
和田山上聖堂成　万巻図書勝百城　剛健比他富山寿　何図松下築新堂
多年跋渉希全州　水郭山村載筆游　論理井然斥妖怪　修身講話賛皇猷
知君足跡遍全球　南米探来及北欧　到処多情客雲片　照然使我想回游
何事置杯易簀新　曽禁烟酒養其身　六旬加二棄吾逝　情緒索然難列陳
大正八年己未六月追悼　甫水井上円了博士得七絶句
辱知碩果生南条文雄泣血合十［印］

（意訳）
藤井宣正と清沢満之の二公が六月六日に亡くなり、十数年後の同じ日にまた不幸が繰り返されてしまった、今度は君が亡くなるといったい誰が思っただろうか、遠空をあおぎ溜息をつくのである。

三十五年前に君は東京大学で学業を修め、私はその将来を保証し栄光を祝した、以来付きつ離れつしながらそれぞれの道を歩んできたが、長年の親交は兄弟のようであった。

哲学専修の学校を初めて創立し、麟祥院境内そして駒込蓬莱町、小石川原町鶏声台の校舎で人々を感化して、文質彬彬（ぶんしつひんぴん）たる俊才を育成したのである。

和田山に完成した哲学堂は、万巻の書物がそろい、確固として長きに渡り存在し続けるのだ、ほかに誰がこのような施設をつくろうと考えようか。

多年を費やし全国各地をめぐった、山村水郷で揮毫し、理路整然と妖怪を斥け、修身講話により皇猷を称えたのである。

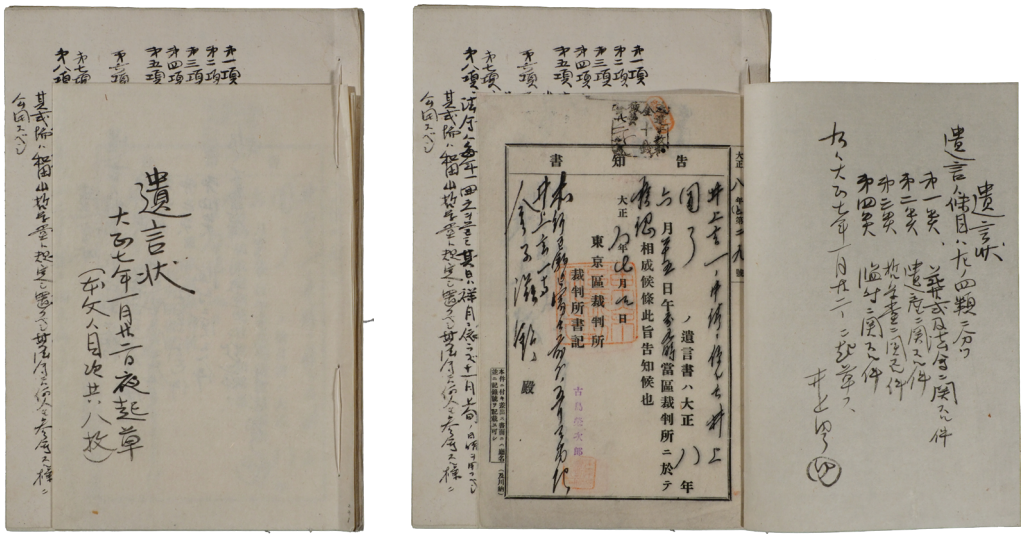
君の足跡をたどれば世界中に及び、南米から北欧まで、あらゆる場所を情感ゆたかに写した紀行文は、私を追体験の旅へと誘うのだ。

どうして亡くなってしまったのか、かつて禁煙禁酒でその身を養生した君は、六二歳で私を置いて逝ってしまった、この虚しい気持ちは言葉に言い表しようのないものである。

031

遺言状

⊙井上円了筆　⊙大正７年（1918）１月22日
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



井上円了は、大正８年（1919）６月６日に旅先の大連で急逝したため、残された家族には何の準備もなかった。しかし当時の旅行者のたしなみと、持ち前の慎重で周到な性格から、大正７年１月にはこの遺言状が用意されていた。なお、この遺言状の内容は、裁判所での検認を経て１月後に告知された。家族でも妻・敬、長男・玄一、長女・滋野は受取人として名前があるが、次女・澄江は未成年であったため円了の妻・敬が親権者として代理になっている。

その構成は、第一類の葬式及び法会に関する件が12項、第二類の遺産に関する件が４項、第三類の哲学堂に関する件が４項、第四類の臨時に関する件が１項あり、全部で４類目21項目となっている。

第一類では、自身の葬式の実施方法が記された後、自分の法会の代わりに、現在も東洋大学の行事として行われる「哲学堂祭」を行ない、四聖を祀ることとその次第が定められている。第二類からは円了の周到な性格が窺えるとともに、遺産分配先のほか、次のようなことが記されている。まず、分配のしかたから、６人の弟妹のうち次弟と三弟が先に亡くなっていたことになる。そして、子どもたちには、哲学堂を除く家屋敷の不動産については家督相続をする玄一に譲るが、その他の現金や株券などは３人に平等に分けること、親族以外にも寄付先が明記されていることなどの特徴がみられる。第三類では、国民道徳普及会については何も記されていないにも関わらず、哲学堂については項を立てていることから、自分の死後に哲学堂が公共物として永続することが、いかに強い意向であったかと想像される。また、第四類は夫婦が一緒に亡くなった場合を想定している。

（出野 尚紀）

第3章

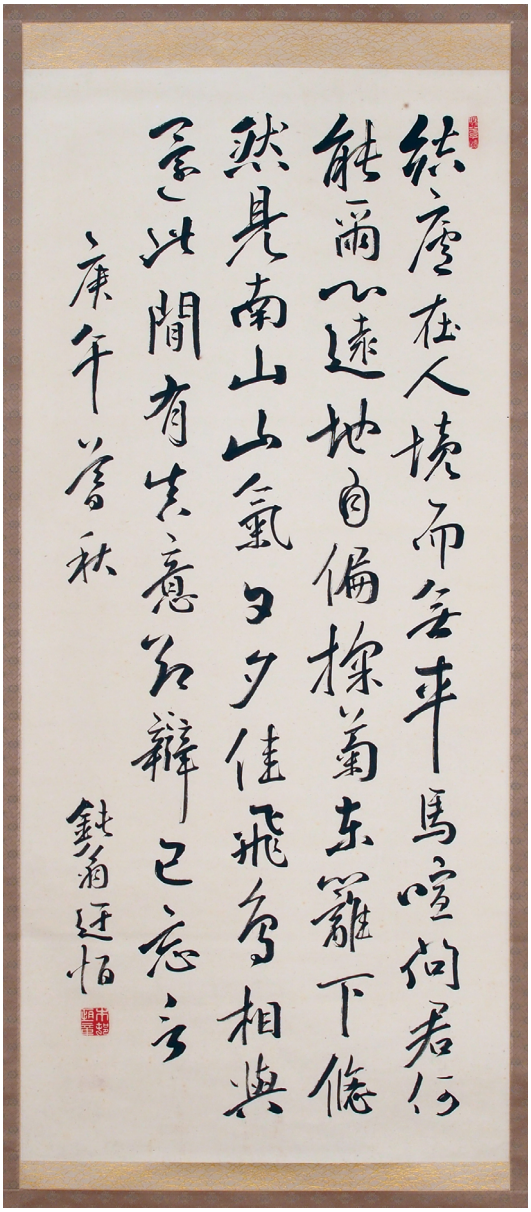
人脈

故郷や学問上の恩師・先達、活動の同志や支援者など、ゆかりの人物の資料を通して、学界から仏教界、そして政官界まで、円了の多岐にわたるネットワークをひもときます。

032

陶淵明「飲酒其五」

⊙紙本墨書、掛幅　⊙木村鈍叟書　⊙明治３年（1870）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



木村鈍叟（1810-1886）は、長岡藩の儒学者。名を恒、字は子一、通称誠一郎（清一郎）。号に竹軒および壽菴。後半生は鈍叟（鈍翁とも）ないし水雲を専ら用いた。天保２年（1831）藩中より選抜され、江戸の朝川善庵に就いて学ぶ。帰国後は藩校崇徳館の都講（塾頭）を経て、郡奉行を勤めた。

北越戊辰戦争による長岡落城後、鈍叟は長岡近在の浦村に居を定め、慈光寺（井上円了生家）に開かれた学校で漢学を教えた。円了は石黒忠悳の家塾で学んだ後、鈍叟に就いたのである。５年ほどの年月をここで過ごし、鈍叟は田沢村（現新潟県十日町市）の村山家に嫁いだ末娘のもとに身を寄せた。

掲載の書軸はもと宮川外新田（浦村の隣村、現新潟県長岡市）の高橋九郎右衛門家に伝来したもの。同家は近世後期に長岡藩西組割元を勤めた家で、慈光寺の檀家総代でもあった。求めに応じて鈍叟が書したのは、隠遁の田園詩人、陶淵明の著名な詩である。

結廬在人境　　廬を結んで人境に在り
而無車馬喧　　而も車馬の喧しき無し
問君何能爾　　君に問う何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏　　心遠ければ地自ずから偏なり
採菊東籬下　　菊を採る東籬の下
悠然見南山　　悠然として南山を見る
山気日夕佳　　山気　日夕に佳く
飛鳥相與還　　飛鳥　相與に還る
此間有真意　　此の間に真意有り
欲辯已忘言　　辯ぜんと欲して已に言を忘る
　庚午暮秋
　　鈍翁迂恒

落款印は「木邨恒章」（白文）。関防印は、蘇東坡の前赤壁賦の一節から「眇々兮予懐」（白文）。９句目は本来「此中」とすべきだが、意味するところは変わらない。都会の塵埃を少しく離れ、片田舎で悠々と満ち足りた生活を送るさまは、古くより文人たちの理想とされた。

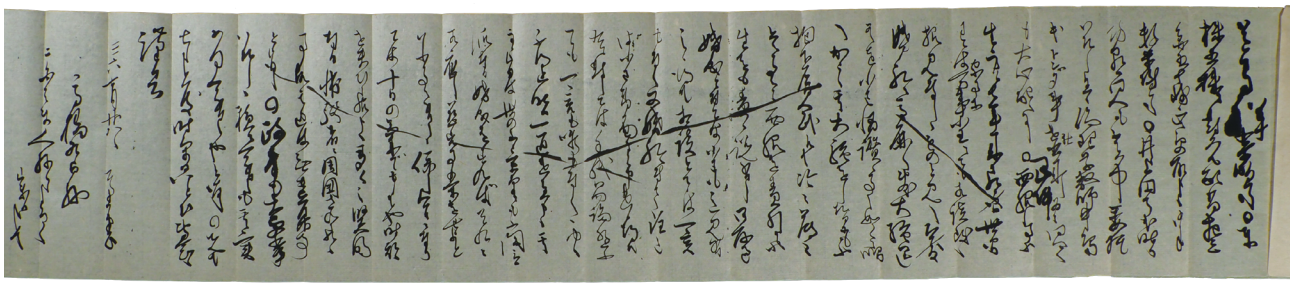
他方でこちら、老齢に及んで御一新の荒波にさらされた鈍叟は、暮らしなれた城下を潔く離れて、新たな生を浦村で送りつつある。かくて鈍叟の境涯と詩が二重写しになってみえてくる。

（松本 剣志郎）

033

高橋九郎宛　石黒忠悳書簡

⊙石黒忠悳筆　⊙明治 36 年（1903）7 月 28 日
⊙東洋大学井上円了記念博物館蔵（高橋家文書 35-4-36）



（袖裏書）
患中ニて延引
七月廿一日発
（書簡本文）
益多祥恭賀仕候　○東
株五株ニ対スル配当拾三
円五十銭　正ニ受取申候　御手
数恭謝仕候　○井上円了氏　昨日
帰朝候　同人も不在中　委託
いたし置候倫理学教師中島
氏　トンダ事を仕出来候為ニ同君
も大心配ニ候　○近隣西脇方　小
生方江七年来願候間　世間
にては家事等万事　小生ニても相談致候
様見なし候ものと見へ　今度
婚礼ニ馬鹿〳〵敷大騒過
候を小生協議候事之如くニ唱
へ　加之其大騒をしたるにも不
抱　下層人民江者冷々薄々
と之事にて　西脇を責　引て小
生をも責候説有之候　御存通
婚義ニ付ては小生も意見有
之候得共　相談とては一言
もなく　又婚礼ニ付て之注意
は小生書面ニて申遣候得共
右ニ対しては手紙ハ勿論逢ふ
ても　一言も噺もなく候ゆへ
不止得昨日一通遣置申候　其
主旨は世の不景気ニも不関　立
派なる婚儀をすればそれニ
相応之慈善事業をせよと
いふ事ニ有之候　併し今日ニなり
ては　十日の菊で　もはや時期
を失ひ居申候　多く之賢明
なる輔弼者ニ周囲され居候
事故　其辺は無遣算事
と被存候　○政府も大更革
いたし候積ニ可有之も其実
如何可有之やと存候　○先者
右申上度　時期御いとひ専念候
謹具
三六　七月廿八日　石黒忠悳
高橋九郎様
二白　令夫人様ニよろしく
山妻より申上候

井上円了の師・石黒忠悳（1845-1941）が、哲学館事件に言及した唯一の書簡である。当時石黒は、男爵、陸軍軍医総監予備役。役職は無役。高橋は、円了実家の慈光寺の大旦那、同寺が所在する浦村の豪農。本書簡には「井上円了氏、昨日帰朝候、同人も不在中、委託いたし置候倫理学教師中島氏、トンダ事を仕出来候為ニ同君も大心配ニ候」とある。円了が第 2 回の海外視察（明治 35 年 11 月から同 36 年 7 月までの世界旅行）から帰って、石黒に会いに来た。不在中に委託の倫理学講師中島徳蔵が、哲学館事件を起こしたため、円了も大心配しているとする。

すなわち、明治 35 年（1902）10 月に中島が行なった倫理学の試験内容に文部省視学官が疑義を呈し、哲学館の倫理学教育が国体を揺るがす内容ではないかとされた。11 月、円了と中島らは同省を訪れ弁明に努めた。直後、円了は海外視察に出かけ、それを待っていたかのように、同省からの問合わせがあり、中島らは弁明書を提出。同省は省議として哲学館の教員免許の無試験検定の認可を取り消す決定をした。中島は辞職したが、新聞に事件の内容や双方の主張が掲載され、世の関心を呼んだ。ロンドンで事件の拡大を知った円了は、表では慎重を期して処分を受け入れ、側面から元勲等に願って同省に働きかけることを指示した。

円了は、師と仰ぎ、政界にも顔がきく石黒にも相談したことが、本書簡からわかる。石黒は元勲クラスではないが、山県有朋や桂太郎など陸軍・政界首脳部につながることから同省への働きかけを依頼したのだろう。しかし、石黒としても何も出来なかった様子が書簡から理解される。実際、本件で石黒は動かず、傍観者的態度に終始した。おそらく、陸軍長州閥が同省を支持していることがわかったからであろう。

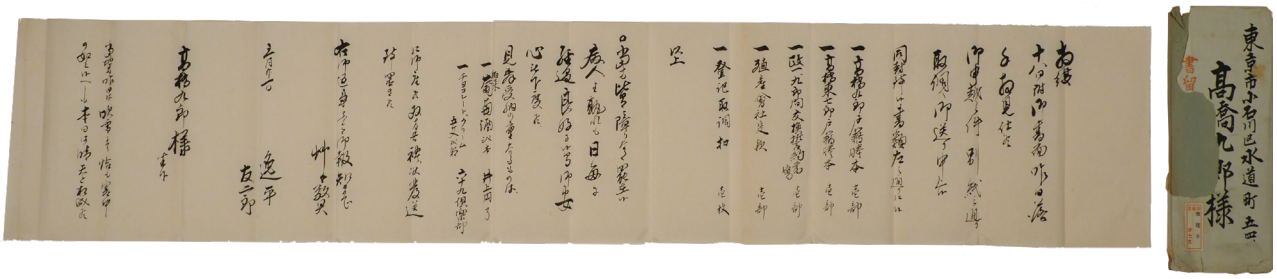
その後、円了は、哲学館大学の認可を申請し、認可されたが、無試験検定は認可されなかった。哲学館大学の苦難の道の始まりである。

（岩下 哲典）

034

高橋九郎宛　高橋友二郎・逸平書簡

⊙高橋友二郎・逸平差出　⊙大正７年（1918）３月 21 日
⊙東洋大学井上円了記念博物館蔵（高橋家文書 35-4-82）



（封筒・宛名）
東京市小石川区水道町五四
高橋九郎様

（通信文）
拝復
十八日附御書面昨日落手拝見仕候
御申越之件別紙之通り取調へ御送り申上候
同封致し候書類左之通りに候
一高橋九郎戸籍謄本　壱部
一高橋東七郎戸籍謄本　壱部
一政一、九郎間交換誓約書写　壱部
一殖産会社定款　壱部
一登記取調控　壱枚
以上
○当方皆々障りなく罷在候
病人者孰れも日毎に能過良好に候間御安心被下度候
見舞受納の重なるものは
一舶来葡萄酒弐本　井上円了
一チョコレート、クリーム　六十九倶楽部
五ケ入弐箱
に御座候双方共礼状発送致し置き候
右御返事旁々御報知まで草々敬具
三月廿一日　逸平
友二郎
高橋九郎様
坐下
当地方昨日は吹雪にて恰も寒中の如く候へも本日は晴天と相成候

本史料は、高橋家当主６代目高橋九郎（1850-1922）宛てに息子友二郎と妹婿逸平が送った書簡である。九郎に頼まれていた書類を送付した報告とともに家族の近況を伝えている。その中の一文に、見舞品として井上円了から舶来品の葡萄酒２本を受け取った旨が記されている。石黒忠悳（1845-1941）からの書簡（東洋大学井上円了記念博物館所蔵高橋家文書〔以下、高橋家文書〕35-4-82）によると、この時期に友二郎の妻が病気を患っており、その見舞いの品として贈られたものであると思われる。大正時代初期の舶来品の葡萄酒の価格は約 60 銭から３円 20 銭と高価なものであった。円了は大正７年（1918）２月 16 日から３月 28 日まで尾張国を巡講中であったため巡講先から送ったのであろう。大正３年８月には未曾有の水害に遭った高橋家を心配し見舞う書簡を送っており（神谷支所所蔵高橋家文書 200）、高橋九郎、そして高橋家が円了にとって重要な存在であることが窺える。

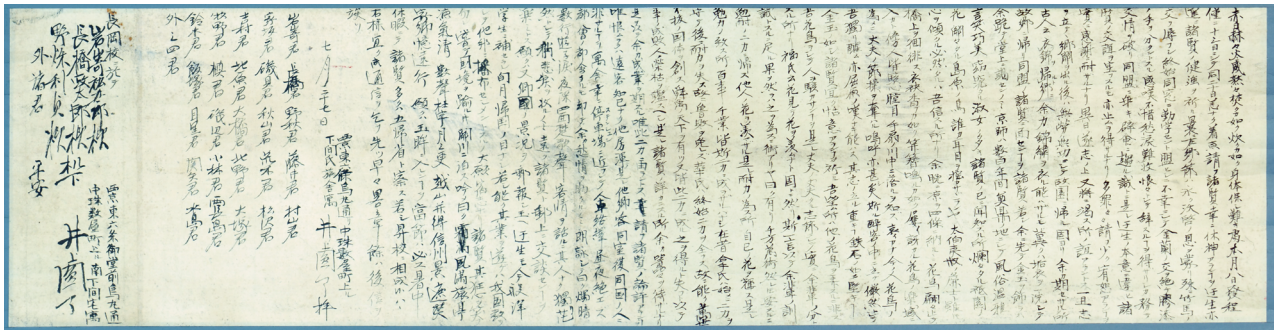
高橋家は、越後国三島郡（さんとうぐん）の豪農で近世後期には長岡藩西組の割元を勤めた家であり、円了の生家である慈光寺の檀家惣代も勤めていた。６代目高橋九郎は、元治元年（1864）から明治２年（1869）まで片貝村（現新潟県小千谷市）の丸山貝陵の塾（耕読堂）にて学び、その後、明治３年（1870）から同６年まで長岡藩士・木村鈍叟（1810-1886）のもとで漢学を学んだ。円了も同時期に木村鈍叟のもとで学んでおり、両者は同学であった。九郎は、新潟県第十六大区小六区の副大区長、宮川外新田・道半村戸長、宮川外新田外 10 か村の連合戸長を勤め、明治 27 年には衆議院議員に初当選、同 31 年に再び衆議院議員となり４年間在職、同 41 年には来迎寺村長を勤めた。その他、神谷信用組合の設立や地域住民への気象情報の提供、救恤活動など様々な活動を行い、大正５年には、長年の功績を称えられ藍綬功章を授与された（高橋家文書 根 -224）。これらの九郎の活動から、高橋家は地域を代表する名望家としての地位を築き、息子である友二郎もそれを継承していった。

（長谷川 彩）

035

岩嵜祐五郎ほか宛　井上円了書簡

⊙紙本墨書、掛幅　⊙井上円了筆　⊙明治 10 年（1877）
⊙長岡市立中央図書館蔵



赤日赫々、炎威熬々、焚クカ如ク、炊クカ如ク、身体保シ難キ処、本月八日発程僅ニ十三日ニシテ同二十日恙ナク着京、請フ、諸賢幸ニ休神アランコトヲ、迂生亦遥ニ諸賢ノ健強ヲ恩ヲ蒙リ、殊ニ在郷ノ節ハ永ク沃啓ノ恩ヲ蒙リ、殊ニ竹馬ノ交ヲ辱フシ終始同窓ニ勤学セント盟ヒシニ、不幸ニシテ金蘭ノ交ヲ絶チ膠漆ノ手ヲ分タントスル、感嘆不惜愁涙難収、恨々トシテ辞スルコトヲ得ザリシカ、務テ交情ヲ破リ同盟ニ乖キ辟命ニ趨ル、誠トニ是レ迂生ノ本意ニ違ヒ諸賢ノ交誼ヲ空フスルモ亦止ムヲ得サルナリ、多罪々々、請フ少ク宥恕アランコトヲ実ニ感謝ニ耐サルナリ、異日遂志ノ上又将ニ竭ス所ノ誼アラントトス、一旦志ヲ立テ、郷関ヲ出ル後ハ、無労無功ニシテ故園ニ帰ル、固ヨリ余カ期セザル所古人云錦ヲ衣テ郷ニ帰ルト、余カ錦繡ヲ衣ル能ハザルモ冀クハ垢衣ヲ一洗シテ故郷ニ帰リ同盟ノ諸賢ニ面センコトヲ、諸賢若シ余ニ先テ金玉ヲ飾ラハ、余跪テ堂上ニ謁センノミ、京師ハ数百年間奠鼎ノ地ニシテ、風俗温雅言笑巧美窈窕タル淑女ノ多キ、諸賢ノ已ニ聞知スル所、爛々タル祇園ノ花関々タル島原ノ鳥、誰カ耳目ヲ揺サヾランヤ、太伯夷叔ノ廉士ト雖トモ、心ヲ傾クル必然タルハ吾信スル所ナリ、余晩ニ涼ヲ四条ニ納ル、ニ花鳥翩々トシテ橋上ヲ徊徘ス、衣袂香フカ如ク笄簪鳴ルカ如ク、屢々訝カル花鳥ノ楽域ニ入カト傍人皆駭心瞠目手扇ノ川中ニ落ルヲ知ズ、哀イカナ今ノ人、花鳥ノ為メニ丈夫ノ節操ヲ奪ハル、嗚呼亦甚シ矣、斯ル酔客ノ中ニ立チ、儼然トシテ吾独リ醒ム、亦屈原ノ嘆ナキ能ハス、其志ノ立ル重キコト鉄石ノ如ク、堅キコト金玉ノ如シ、諸賢宜ク恬意アランコトヲ祈ル、吾望ム所ハ他ノ花鳥ヲ弄スル二非ズ、吾花鳥ヲシテ人ヲ駭カサンコトヲ、是レ丈夫ノ丈夫タル志節ニシテ実ニ余輩ノ分トスル所ナリ、福氏云、花見テ花ヲ羨ムナト、固ト二然リ、斯二三以テ余輩ノ訓誡トスル二足ル、果〆然ラハ之ヲ為ス二術アリヤ、曰ク有リ、千万方術然レトモ要スル二勉耐ノ二力ニ帰ス、他人ノ花ヲ羨マザル、是レ耐力ノ為ス所、自己ノ花ヲ輝ス、是レ勉力ノ致ス所、百事千業皆斯二力ニ成ラザルハナシ、在昔拿氏ハ始メ二二力ヲ守テ後ニ耐力ヲ失ス、故ニ魯敗ヲ免レズ、華氏ハ終始二力ヲ全フス、故ニ能ク万世不抜ノ国体ヲ創ス、舜禹ノ天下ヲ有ツ、又皆此二力ニ成ル、之ヲ得ルト失フト以テ事ノ成敗人ノ栄枯ヲ鑑スヘシ、是レ諸賢ノ詳カニスル所余カ囂々ヲ待ザルナリ、是ヲ以テ余カ成業ヲ期スル、唯此二力ニ由ラントス、

■請フ諸賢ノ論評アランコトヲ、唯恨ムラク八遠客知己ナク、他房渾ノ是レ他郷ノ客同室復同国ノ人ニ非サルコトヲ、寓舎幸ニ停車場〈ステンシュン〉ニ近フシテ人車絡繹昼夜絶エス、都会ノ都会タルモ却テ余カ愁情ヲ助クルノミ、朗詠シテ日ク、燭暗数行遊子涙、夜深四面楚歌声、客情ヲ話ルニ其人ナク独リ芒然トシテ稍悲涙ヲ収ルノミ、遠ク諸賢ト郵上ニ交談センコトヲ楽ミトス、願クハ又郷国ノ景況ヲ郵報シ玉ヘ、迂生モ今般洋学生ニ補セラレ　旬月帰国ノ目ナシ、若シ能ク業ヲ遂ケハ我国教ヲシテ他邦ニ播布セシメントスルノ大願宿志ナリ、諸賢其狂心ヲ笑フ勿レ、嘗テ国境ヲ踰ルトキ関川ニ泊ス、日ク■■〔霜満〕風満旅亭蒸気清、数声杜宇月之更、越山并得信州景、遮莫家郷憶遠行　願クハ玉眸ニ入レンコトヲ、当節ハ必ス暑中休暇ニテ諸賢多ク八五〈ママ〉帰省ト察ス、若シ昇校ニ相成候ハヽ右様宜ク御通信ヲ乞フ、先ツ早々略章、餘ハ後信ヲ竢ツ

西京東六条烏丸通り中珠数屋町上ル
下間氏旅舎寓　井上円了拝

七月二十七日

岩嵜君　長橋君　野秋君　藤井君
村山君　家坂君　磯貝君　秋山君
荒木君　松沢君　吉村君　北原君
大橋君　北野君　大塚君　牧野君
槙君　磯部君　小林君　両長島君
鈴木君　飯塚君　目黒君　関矢君
水島君
外之四名

長岡校二於テ
岩嵜祐五郎様
長橋政太郎様　　机下
野秋利貞様
外諸君　　平安

西京東六条御堂前烏丸通
中珠数屋町上ル南下間宅寓
井上円了

井上円了は明治 10 年（1877）6 月、長岡学校を離れ、7 月末、京都の東本願寺教師教校に入学した。当資料は 7 月 27 日付で長岡学校で同窓であった岩嵜祐五郎らに送った書簡。

『漫遊記』（稿本 明治 10 ～ 18 年 東洋大学井上円了研究センター蔵）によると円了は 7 月 8 日に長岡を出発、20 日に京都に到着したようである。書簡の後半で道中、7 月 10 日に信越国境の関川に宿泊した際に詠んだ漢詩を披露していることから、京都到着後、最初に送ったものと推測される。なお、この漢詩は『屈蠖詩集』（稿本 明治 10 ～ 18 年 東洋大学井上円了研究センター蔵）に「泊関川宿」との題で収録されている。宛名は長岡学校の寮生たちであり、特に冒頭の岩嵜祐五郎・長橋政太郎・野秋利貞の 3 人の名は封書であったと考えられる左端の部分にも記されている。岩嵜は和同会設立の際の結社人員に名を連ねており、長橋とともに円了が長岡学校を離れた後、学校の「雇」となっている。野秋は長岡学校が長岡洋学校として創設されて以来、学校掛を務めていた野秋兵太郎の長男で兵太郎の代理を務めることもあった人物である。

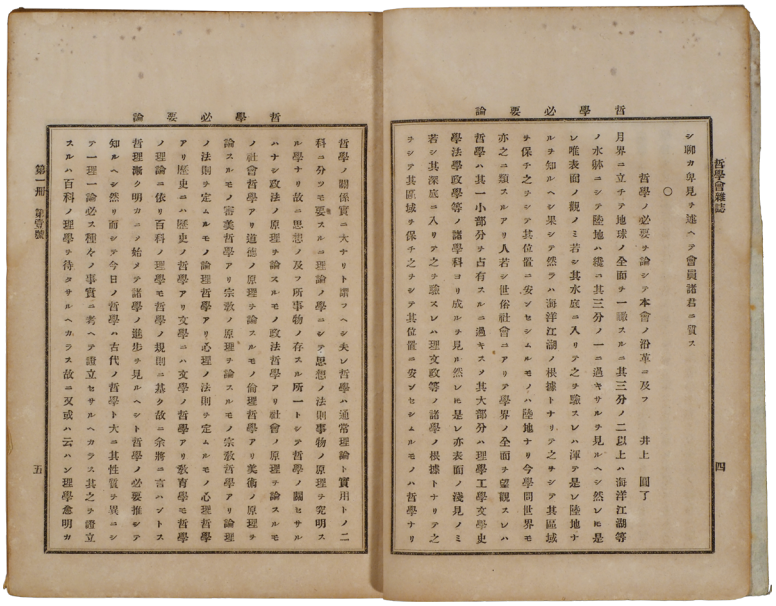
在校中の厚情を謝し、京都の暑さを嘆くとともに、成業の後の再会を期し、祇園・島原など花街の遊女たちを花鳥になぞらえ、酔客で賑わう京都の様子を知らせたうえで、福澤諭吉の「花見て花を羨むな」を訓戒とし、「拿氏」（拿破崙・ナポレオン）と「華氏」（華盛頓・ワシントン）を例に、自らの成業の如何は「勉」「耐」の二力に依ると決意を述べている。一方で、京都は郷里から遠く離れ知己もおらず、都会の喧騒がより一層の寂しさを増し、同窓の友との文通が何よりの楽しみであるとしている。円了の不安と覚悟を窺うことができる。

（田邊 幹）

036

哲学会雑誌（第１冊第１号～第６号 合綴本）

⊙哲学会発行　⊙明治 20 年（1887）２月５日～７月５日発行
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



哲學會雜誌　四

哲學必要論

シ聊カ卑見ヲ述ヘテ會員諸君ニ質ス

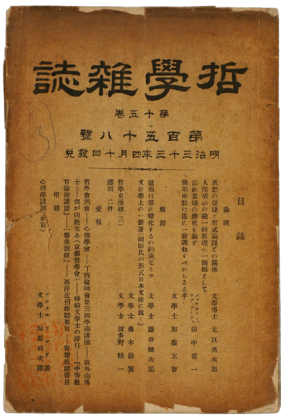
○哲學ノ必要ヲ論シテ本會ノ沿革ニ及フ　井上圓了

月界ニ立チテ地球ノ全面ヲ一瞥スルニ其三分ノ二以上ハ海洋江湖等ノ水鮫ニシテ陸地ハ纔ニ其三分ノ一ニ過キサルヲ見ルヘシ然レトモ是レ唯表面ノ觀ノミ若シ其水底ニ入リテ之ヲ驗スレハ然ラハ海洋江湖ノ根據トナリテ之ヲサシテ其區域ヲ保チ之ヲシテ其位置ニ安ンセシムルモノハ陸地ナリ今學問世界モ亦之ニ類スルアリ人若シ世俗社會ニアリテ學界ノ全面ヲ望觀スレハ哲學ハ其一小部分ヲ占有スルニ過キスノミ其大部分ハ理學工學文學史學法學政學等ノ諸學科ヨリ成ルヲ見ル然レトモ是レ亦表面ノ淺見ノミ若シ其深底ニ入リテ之ヲ驗スレハ理文政等ノ諸學ノ根據トナリテ之ヲシテ其區域ヲ保チ之ヲシテ其位置ニ安ンセシムルモノハ哲學ナリ

哲學必要論

哲學ノ關係實ニ大ナリト謂フヘシ夫レ哲學ハ通常理論ト實用トノ二科ニ分ツモ要スルニ理論ノ學ニシテ思想ノ法則事物ノ原理ヲ究明スル學ナリ故ニ思想ノ及フ所事物ノ存スル所一トシテ哲學ノ關セサルハナシ政法ノ原理ヲ論スルモノ政法哲學アリ社會ノ原理ヲ論スルモノ社會哲學アリ道德ノ原理ヲ論スルモノ倫理哲學アリ美術ノ原理ヲ論スルモノ審美哲學アリ宗教ノ原理ヲ論スルモノ宗教哲學アリ論理ノ法則ヲ定ムルモノ論理哲學アリ心理ノ法則ヲ定ムルモノ心理哲學アリ歷史ニハ歷史ノ哲學アリ文學ニハ文學ノ哲學アリ教育學モ哲學ノ理論ニ依リ百科ノ理學モ哲學ノ規則ニ基タ故ニ余嘗ニ言ハントス哲理漸ク明カニシテ結メテ諸學ノ進歩ヲ見ルヘシト雖ト哲學ノ必要推シテ知ルヘシ然リ而シテ今日ノ哲學ハ古代ノ哲學ト大ニ其性質ヲ異ニシテ一理一論必ス種々ノ事實ニ考ヘテ證立セサルヘカラス其之ヲ證立スルハ百科ノ理學ヲ待タサルヘカラス故ニ又或ハ云ハン理學倉明カ

第一冊　哲學會雜誌　五



哲學雜誌
第十五卷
第百五十八號
明治三十三年四月十四日發行

目錄
論說
哲學雜誌第十五卷第一百五十八號目錄

参考：哲学雑誌（第 15 巻第 158 号、明治 33 年）

『哲学会雑誌』は、明治 20 年（1887）２月創刊の哲学会発行の雑誌である。「哲学会」とは、井上円了が東京大学在学中に彼が中心となって設立した学会だ。この哲学会について円了は、まず井上哲次郎、有賀長雄、三宅雪嶺（雄二郎）、棚橋一郎らに、そして、加藤弘之*、西周、西村茂樹、外山正一**らに相談し開設したと述べている（『哲学会雑誌』第１号）。その上で、学習院に集まり設立について話し合った明治 17 年１月 26 日を哲学会の第１回とした。その際、加藤、西、中村正直、西村、外山、原坦山、島地黙雷、北畠道龍ら 29 名から入会の承諾を得たと円了は言う（『哲学会雑誌』第２号）。

東洋大学の前身である哲学館は、この『哲学会雑誌』創刊と同年に円了によって創設された。第１回哲学会で入会の承諾を得たと名が挙げられている諸氏のうち、明六社のメンバーであった加藤、西、中村、西村、外山の５名は、哲学館創設に関する「哲学館賛成者」（『哲学館講義録』第３期第２年級第 24 号）でもある。これらのことからも、彼らは円了より一世代年齢が上であるが、円了と互いに信頼関係を築いていたことが容易に推測される。

哲学会は、設立以降現在まで、東京大学哲学研究室を中心にして活動が行われている。またその学会誌である『哲学会雑誌』も、第 64 号で『哲学雑誌』と名称変更され、現在に至っている。

このように、円了は一世代年長の５人をはじめ、同世代の哲次郎、有賀、三宅、棚橋などと、同じ時代に哲学の仲間の輪を作ったが、それだけでなく、哲学会とその学会誌、そして東洋大学を残したことで、現代に至るまでその輪を広げ続けているのである。

（竹中 久留美）

* 加藤弘之は、その後哲学館で教壇に立ち、また哲学館顧問および東洋大学顧問も務めた。円了が東京大学に入学した時の東京大学綜理である。

**『哲学会雑誌』第９号には、外山正一による演説「哲学館開館祝詞」が掲載されている。

037

吉凶禍福天主張

⊙紙本墨書、掛幅　⊙勝海舟書　⊙明治 27 年（1894）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

勝海舟（1823-1899）、加藤弘之（1836-1916）、寺田福寿（1853-1894）は「哲学館の三恩人」である。加藤は、円了の東京大学予備門入学から自身の死まで人脈や学識者としての援助を行なった。寺田は、蓬莱町校舎（現郁文館夢学園）の隣りにあった真浄寺で住職を務め、円了の相談相手となったり、寄宿舎生の食事の面倒を見たりした。勝は、初めての面会のときに「精神一到すれば、無限の歳月の間には必ず成るをいう。君もその心得にて哲学館の目的に従すべし」（『井上円了選集』第 24 巻、東洋大学、2004 年、p.69）と応援して、100 円という当時の大金を寄付した。哲学館自前の校舎が建築中に台風によって倒壊したときには、円了にその覚悟を問い、全国を巡って寄付を集めるという経営についてのアドヴァイスを行なうとともに、自らも揮毫して哲学館経営を助けた。円了は勝の死後に「精神上の師」と称え、墓前の手水鉢に海軍軍人や旧幕臣とともに名を刻んでいる。

本資料は、井上家に伝来したもので、清の金蘭生や徳富蘇峰（1863-1957）なども同じ文を記しており、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけては一般的な節であったと思われる。朱子の弟子である陳淳の『北溪字義』に「吉凶禍福是天主張毀誉与奪是人主張立身行己是吾主張三者不相奪也」とあるので、出典はこれに求められるのではないか。記された明治 27 年に円了に渡されたものであれば、同年に寺田や父・円悟（1830-1894）の死に見舞われた円了を励ます意図が海舟にはあったのだろう。

（出野 尚紀）

（書）
［印］
吉凶禍福是天主張　毀誉予奪是人
主張　立身行己是我主張
甲午晩夏
海舟［印］［印］

（書き下し）
吉凶禍福は是れ天の主張、毀誉予奪は是れ人の主張、立身行己は是れ我れの主張。

038

副島種臣の書（「南無阿弥陀仏」、「孔釈琑韓」、「護国愛理」）

⊙紙本墨書、掛幅① ／ 紙本墨書、額装②③　⊙副島種臣書　⊙明治 25 年（1892）①、明治 25 年頃②、明治 31 年③　⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

①「南無阿弥陀仏」

②「孔釈琑韓」

③「護国愛理」

創立期の哲学館の賛助者には、勝海舟（1823-1899）や山県有朋（1838-1922）ら、明治の政官界の実力者、有爵者が名を連ねている。そのなかのひとり、副島種臣（1828-1905）は、外務卿、枢密顧問官、内務大臣を歴任した政治家・官僚であると同時に、能書家・漢詩人としても名を残した多才な人物として知られる。現在、東洋大学には、井上円了の需めに応じて副島が制作した書が３点残されている。

①は、「壬辰極月」の年記から明治 25 年（1892）12 月の作である。副島特有の書体により、六字名号（「南無阿弥陀仏」）をあらわす。円了がわざわざこの書を需めたのは、自らのルーツとしてある真宗に対する信仰心からであろう。

②は、円了が「四聖」として奉崇する４人の哲学者（孔子、釈迦、ソクラテス、カント）をあらわした「孔釈琑韓」の四字額である。年記がなく正確な制作年は不明だが、明治 25 年 11 月発行の『哲学館講義録』の記事に、同年 10 月 27 日、円了が四聖を祀るために催した哲学祭で、副島の「孔釈琑韓ノ四大字ヲ題スル額」を掲げたとある（井上円了「哲学祭記」、『哲学館講義録』第６学年第１号、哲学館、1892 年、p.7）。このことから、本作は①と同時期の明治 25 年頃の作と推測される。

③は、円了の造語である「護国愛理」の４字を書したものである。哲学者として真理を愛しこれを考究するにとどまらず、学問を通して国家社会の発展に尽くさねばならない。「護国愛理」とは、そのような円了の信条をあらわした言葉で、哲学館の教育理念でもあった。「明治戊戌春月」の年記から明治 31 年の作であるが、後年、②とともに哲学堂に移され、園内の「髑髏庵」と名付けられた建物のなかに掲げられた。

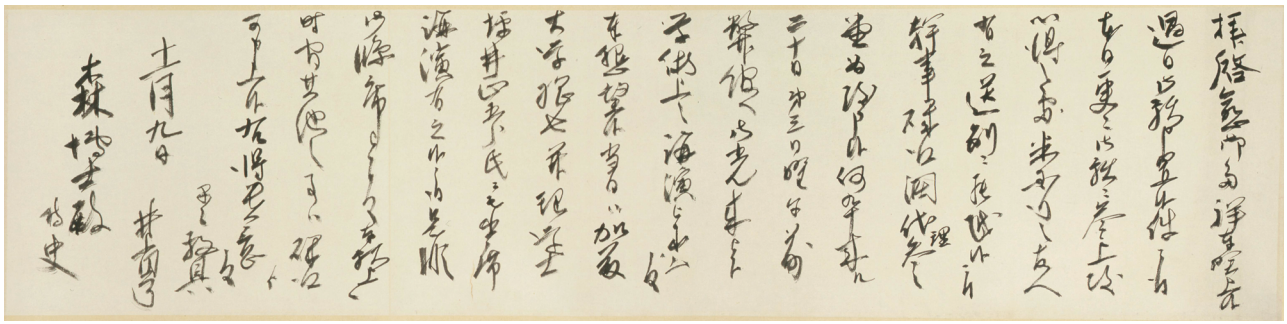
いずれの書も、円了の思想・信仰と行動にかかわる重要な語をあらわした作品であり、また哲学館の賛助者である副島と円了の交流を伝える貴重な資料でもある。

（北田 建二）

039

森鷗外宛　井上円了書簡

⊙井上円了筆　⊙明治 25 年（1892）11 月 9 日か
⊙文京区立森鷗外記念館蔵



拝啓　愈御多祥奉賀上候
過日御願申置候件ニ付
本日更ニ御願ニ参上致
心得之処　米国行之友人
有之　送別ニ罷越候ニ付
幹事磯江潤代理参
台為致申候　何卒来ル
二十日第三日曜午前
弊館へ御光来被下
学術上之講演被成下度
奉懇望候　当日八加藤
大学総長并理学士
坪井正五郎氏ニモ出席
講演有之候ニ付是非
御臨席被下度奉願上候
時間其他之事八磯江より
可申上候　右得貴意度
早々敬具
十一月九日　井上円了
森博士殿
侍史

井上円了が森鷗外（1862-1922）に哲学館での講演を依頼する内容。講演の日程や鷗外のほかに帝国大学総長・加藤弘之（1836-1916）、人類学者・坪井正五郎（1863-1913）らが登壇する旨が綴られている。冒頭に「過日御願申置候件」とあるように、この1か月前の明治 25 年（1892）10 月 13 日の「観潮楼日記」には、円了が鷗外のもとを来訪していた記録が残されている（森林太郎『鷗外全集』第 35 巻、岩波書店、1975 年、p.231）。

> 十三日井上円了訪ひ来て、哲学館の日曜講筵〈ママ〉にて何か講ずべしと求む。折もあらば、食物の話をせむと約して帰し遣りぬ。名刺の片隅に、禁酒禁烟、諸事倹約と細書したり。これもその人となりを知る一端なるべし。応接の間、危座して膝に手をおき、微笑みつつ細き声にて物言ふ人なり。容貌猶僧侶めきたるもをかし。終日乍晴乍雨。

面会に訪れた円了の様子が詳細に書き留められており、その「人となり」は鷗外にとって印象的であったことが窺える。円了が依頼した「哲学館の日曜講筵」とは、哲学普及の一環として人々に開放された公開講座「日曜講義」のことである。明治 23 年から始められ、講師は通常の講義を受け持つ定時講師のほか、別途依頼された臨時講師が務めた。明治 26 年度 * の「哲学館報告」（『哲学館正科講義録』第 7 号号外、哲学館、1894 年、p.11）、および明治 26 年 7 月の『哲学館規則』（哲学館、1893 年）の講師一覧のなかには「医学博士　森林太郎」の名が確認でき、この年に鷗外が哲学館で講演を行っていたことがわかる。本書簡は、10 月の面会時に依頼した日曜講義の詳細を伝えるものと考えられる。

なお、歌人・与謝野鉄幹（1873-1935）は哲学館で行われた鷗外の講演を聴講しており、次のように語っている（森於菟・森潤三郎編『鷗外遺珠と思ひ出』、昭和書房、1934 年、p.411）。

> 自分は明治二十五年八月に東京へ来たが、翌九月に駒込の哲学館で先生と岡田良平氏との講演があつたのを聴いた。先生の題目は米食と衛生の関係で、最近の軍隊衛生に実験せられた結果、米食の栄養価値の高いことを立証せられたのであつた。此日自分は初めて軍服姿の颯爽たる青年時代の先生を拝したのであつた。

上記は「年月の精確を除外すれば、其他の記憶は確か」と前置きしたうえでの証言である。実際に、講演日と登壇者が書簡や「観潮楼日記」と食い違う点は留意すべきであるだろう。しかしながら、鷗外はこの頃に兵食試験委員として米食、麦食、洋食の比較を行い、明治 23 から 24 年にかけて米食の優位性を発表している。鉄幹の回想と当時の鷗外が取り組んでいた職務、そして「観潮楼日記」中の「食物の話をせむ」という一節を勘案すれば、この証言と書簡との関連は、今後検討する価値があると言える。

（佐々木 悠里）

* 明治 25 年 1 月から明治 26 年 12 月までの記録を掲載している。

040

井上円了像

⊙ブロンズ　⊙新海竹太郎作　⊙明治 39 年（1906）
⊙東洋大学蔵

参考：完成時の井上円了像（『東洋哲学』第13編第10号、東洋哲学発行所、明治39年）

作者の新海竹太郎（1868-1927）は、明治維新の年に山形の仏師の家に生まれ、長じて近衛騎兵大隊に入営するが、在隊中に初めて作った馬の木彫が評判となったことがきっかけで彫刻家を志し、馬の彫刻を得意とした後藤貞行（1850-1903）に師事した。

その後国内の美術展で数々の賞を受賞し、明治 33 年（1900）から翌年にかけてドイツへ留学して彫刻家エルンスト・ヘルター（Erunst Gustav Herter 1846-1917）に師事。明治 35 年の帰国後は文展の審査員をつとめた他、太平洋画会の中心メンバーとして活躍するなど、明治、大正期の彫刻界に大きな影響力を与えた。銅像制作も数多くこなし、《北白川宮能久親王像》（千代田区北の丸公園）、《大山元帥像》（同九段坂）など現在も国内にのこる著名な銅像を制作している。

本作は、東洋大学の前身である哲学館（後の哲学館大学）の創立者・井上円了が明治 39 年に同校を辞職する際、制作された肖像彫刻であり、同年の『美術新報』（5 巻 8 号）に「前哲学館長井上円了博士の報恩紀念に建設する銅像原型製作中にて、八月中旬迄に作成鋳造に移す運びに至る可し」と報じられている。アカデミックな作風を特色とするヘルターに通じる手堅い技法で仕上げられており、細長い基台が像を支える台座のスタイルや、瞳の部分が刳り抜かれている点に明治期の彫刻の特色を示す。

かつて本作は大学の屋外に設置されていたが、学生運動が盛んだった時期に頭部に強い衝撃を受けて陥没し、その後現状のように修復された。

（藤井 明）

041

青巒甫水慧雲三先生合作扇面

⊙紙本墨画・墨書、掛幅　⊙前田慧雲画、井上円了・大内青巒賛　⊙大正６年（1917）
⊙池上正男蔵

（大内青巒賛）
［印］
御房鋳馬
蹄実顆旗
蜂穴
藹々青巒
［印］［印］
（井上円了賛）
［印］
煩悩泥
中菩薩
生根
悪業浪
上仏果
結実
甫水道人
題
［印］［印］
（前田慧雲墨画）
［画（蓮実と蓮根）］
雲翁［印］

この掛軸は、大正６年（1917）11 月 11 日の日曜日に挙行された「東洋大学創立三十年記念祝賀式」で記念品として配布された「三学長合作の記念扇」（『東洋哲学』第 24 篇第 11 号、東洋哲学発行所、1917 年、p.52）の扇面（原本と思われる）を軸装したものである。三学長とは、東洋大学初代学長井上円了、第２代学長前田慧雲（1857-1930）、第３代学長大内青巒（1845-1918）であり、箱蓋表の墨書の「青巒甫水恵（慧）雲三先生合作扇面」と一致する。掛軸の装幀者は大正７年６月１日に第４代学長となった境野哲（黄洋 1871-1933）、装幀日は昭和６年（1931）５月であることが箱蓋裏の墨書の「昭和六年五月装幀成日 黄洋題」からわかる。また箱裏には次のとおり記されている。

> 此書故境野黄洋先生装幀し蔵す　後富田斅純師に渡る　昭和十八年七月
> 高嶋米峰先生東洋大学長に就任せられるゝに及んで斅純師之を米峰先生に贈る
> 米峰先生逝去の後遺族より遺品として余に贈られる
> 昭和二十四年十二月　高木武三郎［花押］

富田斅純は東洋大学第 12 代学長高嶋米峰（1875-1949）と同期で、明治 29 年（1896）７月に哲学館宗教学部を卒業し、明治 44 年３月に講師の称号を授与されている（『東洋哲学』第 18 篇第４号、p.50）。箱内底面には「謹呈　東洋大学長高嶋米峰先生座下　昭和十八年七月七日　辱知　富田斅純」とあり、斅純は米峰の学長就任日（昭和 18 年７月１日）の１週間後にこの掛軸を贈ったことがわかる。

黄洋と米峰は哲学館に学び、田中治六（我観）とともに「三羽烏」とも言われた。黄洋は本学出身者初の学長に就任するが、大正 12 年の「紛擾事件」で学長の職を辞し東洋大学を去った。一方の米峰は「紛擾事件」で反学長派の校友代表となり、黄洋と袂を分かつことになった。その後の二人がどのような関係であったかはわからない。黄洋から斅純を介して米峰に贈られたこの掛軸に、私は二人の縁を強く感じてしまうのである。

黄洋が本学を去ってから 20 年、死去（昭和８年 11 月 11 日）から 10 年、奇しくも米峰は学長に就任した。戦時体制が強化される厳しい社会状況の中、黄洋が三学長合作の扇で仕立てた東洋大学の襷（掛軸）を米峰は受け取った。その胸にはどのような思いが去来したのであろうか。

（池上 正男）

042

男子幽霊図

⊙絹本着色、掛幅　⊙西郷孤月画　⊙明治 44 年（1911）
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵

明治 44 年（1911）1 月から 2 月にかけて台湾で巡回講演を行っていた井上円了が、台北で偶然同宿となった日本画家・西郷孤月（1873-1912）に依頼して描かせた幽霊図。概して幽霊図は女の幽霊を描いたものが多いが、孤月は「幽霊の図」というオーダーに対して、あえて男の幽霊を描いてみせた。依頼した当人も、まさか幽霊が男のすがたで描かれるとは思ってもみなかったようで、「男子の幽霊は弧月の筆を以て嚆矢とす」という賛辞とともに次の七絶一首を贈り、画家と作品に敬意を表した（井上円了『南船北馬集』第 6 編、修身教会拡張事務所、1912 年、p.31）。

台北初逢情最温、曾聞孤月画名喧、君能為我揮神手、開得幽霊新紀元。

（台北で初めて会いあたたかなその人柄にふれた、孤月君の絵の評判は以前より聞いて知っていたが、君は私のために神の手を揮い、幽霊の新紀元を開いたのである。）

孤月は、もとは近代日本画の巨匠・橋本雅邦（1835-1908）の門下生のひとりで娘婿でもあったが、円了が台湾で出会ったときにはすでに雅邦の下を離れ、各地を放浪してまわる生活を送っていた。奇遇にも、かつて雅邦に「四聖像」（本書 pp.8-9 参照）の制作を依頼した円了は、およそ 20 年の歳月を経た後、今度は弟子の弧月に絵を需め、その作品をコレクションに加えたのである。

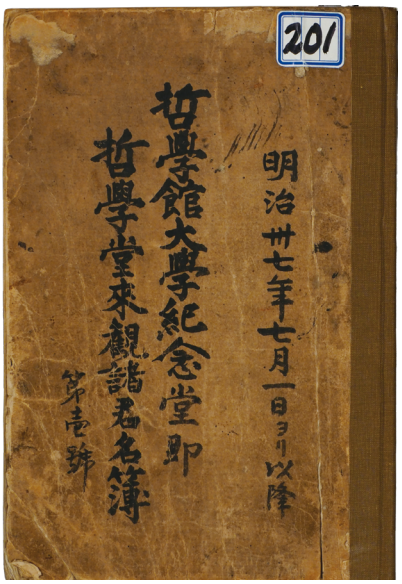
なお、この翌年、病を得て台湾から帰京した孤月は、闘病むなしく 8 月 31 日に本郷区駒込上富士前町 5 番地（現文京区本駒込）の住まいで息を引き取るが、偶然にもその終焉の地は、円了の自宅（駒込富士前町 53 番地、現文京区本駒込）から歩いて 10 分たらずのところである。これもまた、「男子幽霊図」をめぐるふたりの奇遇な縁といえようか。

（北田 建二）

043

哲学堂来観諸君名簿 第１号

⊙明治 37 年（1904）7 月 1 日～〔明治 37 年 7 月 3 日～ 43 年 6 月 20 日記載〕
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



この名簿は哲学堂の来訪者名簿の１冊目であり、現存するものは全部で 16 冊ある。東洋大学にはほかに詩歌を書くことができる帳面の第１冊が所蔵されている。表紙、表紙裏には井上円了の手によるタイトル、断り書きが記されているが、以降は来訪者が自由に記している。

表出のページは明治 37 年（1904）7 月 15 日の続きであり前ページに３人の名前がある。この日は７月３日の次の公開日であった。15 日の記名者はすべて円了と関係を持っていた者であり、この頃の来訪者は哲学館・京北中学の教員、学生・生徒がほとんどである。ここに記されているなかから幾人か取り上げて紹介したい。

右端の西山哲治（1883-1939）は、兵庫県氷上郡出身。明治 38 年７月に哲学館を卒業したあと、ニューヨーク大学に留学し、Doctor of pedagogy を取得。明治 45 年、巣鴨に帝国幼稚園・小学校を設立し、校長となる。大正 15 年（1926）から東洋大学教授も務めた。なお、妻は哲学堂の施工責任者であった山尾新三郎の娘である。

左隣の西垣尭則は、哲学館修了後に大阪の立川文庫で有名な立川文明社から『阪神電気鉄道沿線名所案内』（明治 41 年）、『格言教訓全書：品性修養人格鍛練』（明治 42 年）、『伊蘇普物語二百話』（明治 44 年）などの本を出している。円了の『南船北馬集』第４編によれば、明治 42 年１月 31 日に神戸で行われた同窓会に出席している。

左ページ右から３番目の東敬治（1860-1935）は、岩国の陽明学者・東澤瀉の息子。哲学館の漢文・漢学の講師を務め、東洋大学における朝鮮・中国の儒学者との交流に関係した。大正期には渋沢栄一（1840-1931）の陽明先生全書講読会で講師を務めていた。王守仁（1472-1529）の儒学を陽明学と呼ぶことになったのは、彼の活動を通してのことであるとされる。

左ページ右から５番目の林竹次郎（1875-1947）は、東京神田の出身。号を古渓という。哲学館卒業後は京北中学に勤め、国語漢文を教え、昭和８年（1933）に立正大学教授に転じた。歌人・漢詩人でもあり、「浜辺の歌」「東洋大学校歌」の作詞者でもある。

（出野 尚紀）

044

六賢人像

⊙油彩・カンヴァス、額装　⊙中沢弘光画　⊙明治 40 年代
⊙中野区蔵（哲学堂公園事務所保管）

聖徳太子

菅原道真

荘子

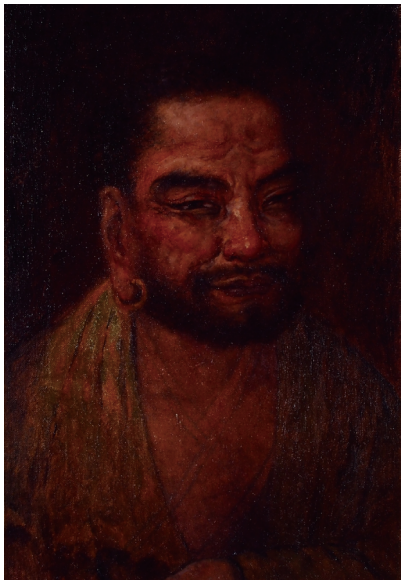
井上円了が日本・中国・インドの東洋 3 国の思想を顧みて、6 人の人物を取り上げたもの。日本と中国は思想の流れを転換させた学者が選ばれており、インドは円了が時代区分をすることができなかったため、思想の 2 大潮流からひとりずつ選ばれている。「四聖堂」は 4 人、「三学亭」は 3 人と建物の形と称揚する人物の人数が合致するように選ばれており、選択の範囲も世界・東洋・日本と異なっている。現在は「無尽蔵」（本書 p.36 参照）に収められているが、もとは「六賢台」の 3 階に鐘と結ばれて掛けられていた。

3 国の学者を代表するとして選ばれた 6 人のうち、聖徳太子は憲法十七条制定などの為政者としての面ではなく、『法華義疏』などの作者として上古の日本思想を代表し、菅原道真も右大臣まで昇った政治家としてよりも、和歌・漢詩に秀でた上に史書をまとめた漢学者として中古を代表する。荘子は孔子以後の諸子百家の雄として周代（戦国時代）の中国思想を代表し、朱子は宋学の代表的学者であり、儒学の一大転換期である宋代を代表する。龍樹（ナーガールジュナ）はすべての大乗仏教の淵源である八宗の祖として仏教を代表し、迦毘羅仙（カピラ）は古代インド生まれの仏教以外の思想の総称である外道を代表する。

制作した中沢弘光（1874–1964）は明治 33 年（1900）に東京美術学校を卒業した洋画家・デザイナーで、黒田清輝（1866–1924）に師事し、白馬会・光風会・白日会といった美術協会の創立に参画した。なぜ中沢が六賢の肖像を描くことになったのかに確たる証拠はないが、東京美術学校（現東京藝術大学）教授であり、円了の肖像画を制作した岡田三郎助（1869–1939 本書扉参照）との縁によると思われる。中沢の洋画は女性像が多く、男性を画いたものは少ないので、これらは貴重な作品群である。

（出野 尚紀）

朱子



龍樹

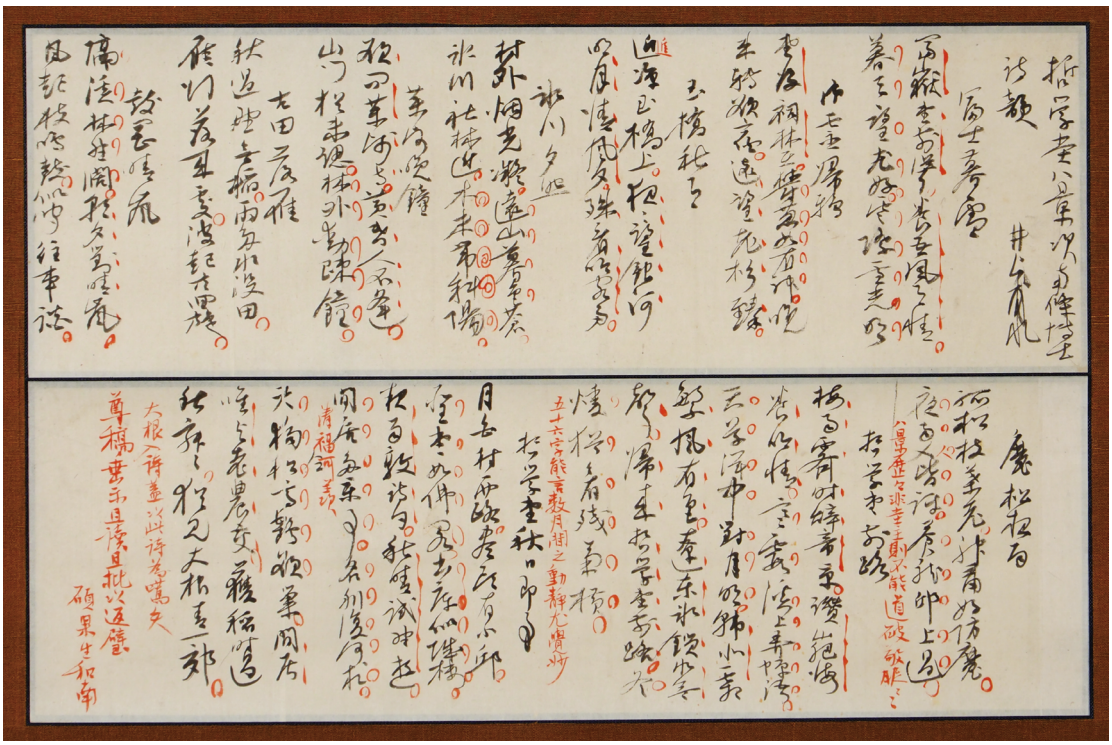
迦毘羅仙

哲学堂（左・四聖堂、右・六賢台）

045

哲学堂八景漢詩（南条文雄朱筆）

⊙紙本墨書、掛幅　⊙井上円了筆、南条文雄朱筆
⊙東洋大学井上円了研究センター蔵



「哲学堂八景」は、井上円了が哲学館大学の移転予定地であった現在の哲学堂公園となっている場所がもつ立地の素晴らしさを宣伝することを目的に、瀟湘八景を元に選定した。本作はそれぞれ周囲の光景に加え、ランドマークとして聳え立っていた天狗松を題材に作った漢詩である。その漢詩にさらに漢文を加えて南条文雄（1849-1927）に添削を依頼し、コメントを受けている。

南条は、大垣の出身の真宗大谷派僧侶で、号は碩果。明治 9 年 (1876) よりサンスクリット仏典研究のためイギリス・オックスフォード大学に留学して、マックス・ミュラー（Friedrich Max Müller 1823-1900）に師事し、漢訳仏典の英訳、梵語仏典と漢訳仏典の対照研究をし、明治 17 年に Master of Arts の称号を得て帰国した。哲学館から、よりオリジナルに近い仏典を求めてチベット探検に赴いた河口慧海（1866-1945）、能海寛（1868-1903?）に強い影響を与えた。清沢満之（1863-1903）の後に真宗大学（現大谷大学）学監を務め、円了の東洋大学葬においては導師を務めた。

また、南条は円了の死後、円了が東京大学学生時代に同じ下宿に住んでいた藤井宣正（1859-1903）、ともに手を携えて哲学館を創立した清沢、この円了と関係の深い 2 人の命日に、その 15 年後、円了もまた逝去するという奇縁を漢詩に詠んでいる（本書 p.41 参照）。

（出野 尚紀）

資料編

井上円了 生涯と肖像

安政5年(1858)
越後国、真宗大谷派慈光寺の長男として誕生

明治7年(1874)
新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）に入学

明治11年(1878)
東京大学予備門に入学

明治14年(1881)
東京大学文学部哲学科に入学

明治18年(1885)
東京大学卒業

明治19年(1886)
哲学書院創業

明治20年(1887)
本郷湯島麟祥院境内にて哲学館を創立

明治21年(1888)
第 1 回海外視察（明治 22 年帰国）

明治22年(1889)
駒込蓬莱町に哲学館校舎を移転

明治23年(1890)
全国巡回講演を開始

東京大学予備門時代
明治 12 年（1879）
21 歳

東京大学文学部時代
明治 16 年（1883）
25 歳

哲学館創立期
（第 1 回海外視察中）
明治 22 年（1889）
31 歳

哲学館館主として
（哲学館の制帽姿）
明治 26 年（1893）4 月
35 歳

明治30年(1897)
小石川原町に哲学館校舎を移転

明治32年(1899)
京北中学校を創立

明治35年(1902)
第 2 回海外視察（明治 36 年帰国）
哲学館事件

明治37年(1904)
哲学館大学を開校（初代校長に就任）
哲学堂の開堂式を挙行

明治39年(1906)
哲学館大学学長・京北中学校校長を退任
修身教会運動のため全国巡講開始

明治44年(1911)
第 3 回海外視察（明治 45 年帰国）

大正4年(1915)
哲学堂図書館（絶対城）竣工

大正5年(1916)
哲学堂の一般公開を開始

大正8年(1919)
中国・大連にて 61 歳で逝去

哲学館館主兼京北中学校校長の時代
明治 32 年（1899） 3 月
41 歳

哲学館大学学長退任後
明治 39 年（1906）
48 歳

第 3 回海外視察帰朝後
明治 45 年（1912）
54 歳

晩年期
大正時代
50 代後半以降

執筆者

天ケ嶋 岳（川越市教育委員会教育総務部文化財保護課主幹）
池上 正男（東洋大学特別嘱託）
井関 大介（東洋大学井上円了研究センター研究助手）
出野 尚紀（東洋大学井上円了研究センター客員研究員）
岩下 哲典（東洋大学文学部史学科教授）
太田 有紀（埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸員）
岡田 正彦（天理大学人間学部教授）
北河 直子（山崎記念中野区立歴史民俗資料館学芸員）
北田 建二（東洋大学井上円了記念博物館学芸員）
甲田 烈（東洋大学井上円了研究センター客員研究員）
佐々木 悠里（東洋大学大学院文学研究科日本文学文化専攻博士前期課程修了）
佐藤 厚（東洋大学井上円了研究センター客員研究員）
重藤 智彬（大田原市那須与一伝承館学芸員）
ライナ・シュルツァ（東洋大学情報連携学部准教授）
竹中 久留美（東洋大学非常勤講師）
田中 純一朗（井原市立田中美術館学芸員）
田邊 幹（新潟県立歴史博物館専門研究員）
中村 崇高（東洋大学非常勤講師、株式会社出版文化社シニアアーキビスト）
長谷川 彩（千葉県文書館嘱託）
長谷川 琢哉（親鸞仏教センター嘱託研究員）
藤井 明（小平市平櫛田中彫刻美術館学芸員）
古山 千尋（千葉県立房総のむら学芸員）
松本 剣志郎（法政大学文学部専任講師）
三浦 節夫（東洋大学ライフデザイン学部教授、井上円了研究センター研究員）
龍澤 潤（東洋大学非常勤講師、 深川東京モダン館副館長）

写真提供・撮影

小平市平櫛田中彫刻美術館、文京区立森鷗外記念館、山崎記念中野区立歴史民俗資料館
井関 大介、出野 尚紀、北田 建二
西村 優花（東洋大学文学部史学科 4 年）、藤村 彩香（東洋大学文学部史学科 4 年）
井上円了記念博物館 2019 年度館務実習生

編集

井関 大介、出野 尚紀、北田 建二、竹中 久留美

監修

三浦 節夫

DTP デザイン・制作

高野 敦子

井上円了没後 100 周年記念図録
CATALOG 井上円了 ―モノから見る思想・活動・人脈―

発　行　日　：2019年12月23日

編 集・発 行　：東洋大学井上円了研究センター
〒112-8606　東京都文京区白山五丁目28番20号
TEL　03-3945-7213

印　　刷　：蔦友印刷株式会社

本書に掲載されている写真および記事を無断で転載することを禁止する。